

## 第 2 部

---

### ● パネル・ディスカッション【高大接続から入試改革を考える】

パネリストによる取組事例紹介

1. 泉 雄二郎（島根県立松江北高等学校 校長／島根県公立高等学校長協会 会長）
2. 立上 良典（広島県立西条農業高等学校 校長／広島県高等学校長協会 会長）
3. 松崎 貴（島根大学生物資源科学部 教授／島根大学地域未来戦略センター長）

助言者 リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長

文部科学省高大接続システム改革会議委員 小林 浩

コーディネーター 島根大学教育・学生支援担当副学長 荒瀬 榮

### ● 総合討論

取組事例 1  
 高大接続から入試改革を考える  
 「地元高校から見た島根大学入試改革」

島根県立松江北高等学校 校長 泉 雄二郎

改めまして、皆さん、こんにちは。松江北高校の泉雄二郎と申します。

小林さんのスピードラーニングに私も必死についていきまして、疲れ切っております。ふだん生徒は、チョークアンドトークのこういった授業を受けてるんだなということを改めて感じた次第です。こういうテーマでお話ししようと思いましたが、内容は5つに絞ってお話をしたいと思っております。

1) なぜ、入試改革が必要なのか

入試改革が必要な理由 I

まず、入試改革がなぜ必要なのかということについて、これは私見を交えてお話ししようと思っております。2つの理由をお示ししたく存じます。

一つは、これは小林さんのお話にありましたけれども、やはりつながってないということなんです。小学校、中学校までの学習と大学の学習は比較的つながっているのだけれども、高校の学習、学習内容ではありません。学び方、学ばせ方の部分についてギャップがあるということでもあります。したがって、高校に入ると、いや、そんなことしててもだめだよと言われるし、大学に行くと、いや、今までそうやってたかもしれないけどそれじゃだめだよと2回否定されるわけですから、放っておくと高校で一生懸命やったことが剥がれ落ちる傾向にあるということ。したがって、学び方の部分でやはり縦につないでいく必要があるかと考えるわけです。

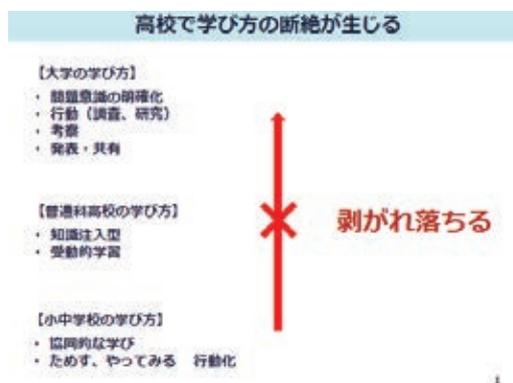
これは、元イェール大学の准教授でいらっしゃる斉藤淳先生の写真であります。先生は大学をやめられまして、今、東京と、御出身の山形で英語の私塾を立ち上げておられますけれども、7月に松江北高校にお出かけいた



- 1) なぜ、入試改革が必要なのか
- 2) 入試改革で高大をうまく接続する
- 3) 大学に触発された学生の歩み
- 4) 地域課題研究に触発された生徒の歩み
- 5) こんな生徒を入学させたい

入試改革が必要な理由

I



だき、生徒、保護者向けの講演と英語の授業をしていただきました。その中で、斉藤先生、日本の入試、それからアメリカの入試についてよく御存じですので、その比較を次のようにまとめてお話をいただきました。

まず、日本の入試はやはり知識しか問いかけてないと。それに対してアメリカの入試は、これも小林さんの話にありましたけれども、もちろん学力は共通テストではかるんだけど、それ以外に推薦状とか志望動機とか課外活動の実績、そういったものを評価するんだと。特に、推薦書の内容については、この若者は社会に、あるいは大学にどう貢献する力を持っているかということをしっかり書かれるのだそうです。したがって、高校の授業はいい推薦書が書けるような形という形の授業になってまいりまして、プロジェクト型、PBL型の授業が多くなるんだと。大学の入試がやはり高校の授業に影響を与えているというお話でありました。

では、これから必要なこととして、幾つか斉藤先生お話しになりましたが、一つは、なぜ学ぼうとしているか、その動機をやっぴりしっかり入れ込む必要があるだろうと。そのために自己分析、自分を深く掘るような場を高校の教育の中で設定していく必要があるだろうと。自分を深く掘るためにさまざまな活動、いわゆる教科型の授業だけではなくて、いろんな経験をさせることが必要であると。これからの世の中に生きる若者たちに必要な教育の内容について問いかける力、問題解決力というような言葉で今言われてますけども、そういったものが求められてくるのだと。学問的な、いわゆる普遍的な価値のあること以外に、社会とか時代の流れの文脈の中での価値は何なのかということを見きわめるような力が必要になってくる、そういったことを学ばせる教育であってほしいということをおっしゃいました。これが入試改革が必要な理由の一つです。やはり高校の授業は大学入試の中身に大きく影響されてるわけでして、知識を問いかける入試である限り、知識入れ込み



斉藤淳 (さいとうじゅん)  
1969年山形生まれ。1990年高松代表、イエール大学大学院で政治学を学び、博士号を取得。同大学で政治学部の助教授を務めた。2012年に帰国。同年、東京都立山形県で中高一貫校の英語と数英の部を創設する。著書に『世界の赤毛インテリがやっている英語勉強法』(中国出版)、『10歳から身につく 問い、考え、表現する力』(エール大学で学び、教えたこと) (中国出版) など

## 入試改革が必要な理由

### II

#### 入学者選抜 日米比較 JPREP塾長 斉藤淳先生 (元イエール大学准教授)

##### 日本の入試

- ・「正解」だと受け入れられている**知識しか問わない**
- ・結果として、高校の授業は**知識伝達に終始している**

##### アメリカの入学選抜

- ・学力入試試験の結果、学校の成績、推薦状、志望動機書、課外活動の実績
- ・推薦書は**プラス評価**、内申書は**マイナス評価**
- ・推薦書 → 個として集団に**どう貢献するか**、他人に**どう貢献したか**
- ・いい推薦書が書ける授業 → **プロジェクト型の授業へ**

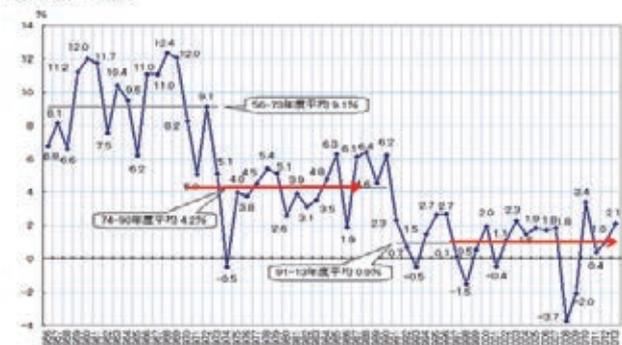
##### これから必要なこと

- ・なぜ学ぼうとしているかを**真剣に考える機会があるか**
- ・**自己分析が必要** → 生きている意味を考える
- ・課外活動 → 部活動、インターン など**いろんな経験をさせる**

##### 良い教育とは何か

- ・**問いかける力を重要視すること**
- ・問いの設定が**非常に重要** → **提案する**
- ・物事の**価値がわかる力** → **普遍的価値と文脈依存的価値**
- ・学びたい**意欲を大切に**する教育

親と子どもの時代意識は異なっています



(注) 年度ベース、BOSJIA連続方式推計。平均は各年度数値の単純平均。1990年度以前は「平成2年国民経済計算年報」(BOSJIAベース)、1991-94年度は年報(平成21年度版)による。それ以降は、2014年10-12月期1次速報値 (2015年2月16日公表)  
(資料) 内閣府PIAサイト



てる。さあ、どうするか。やっぱりこれまでにない新しい価値を創造していくことが必要になってくると。そのためにはキャッチアップ型の、これが正解であるというモデルを追っかけていくのではなくて、まず自分の形でトライしてみる。トライしてうまくいかなかったらそれを変えていくという修正主義の考えが必要であるということです。ですから、入試が正解は1つという形を今までずっと課してきてるわけですけど、それとは違った問いかけが必要になるというお話をなさいました。

## 2) 入試改革で高大をうまく接続する 生徒の学びに火をつけるために

今の2つの入試改革が必要な理由に基づいて、これからどうしていったらいいかということについてなんですけども、この流れが今までやってきたことです。アカデミズムの専門集団がいわゆる教科というまとまりをつくって、それが学習指導要領の中に落とし込まれて、教員はそれに基づいて授業をする。その中で、子供たちの学びに火をつけるための方策は、教科の魅力で火をつけるという方法で展開されてきたわけです。これはこれで重要なことだと思います。ですが、これだけでいいだろうか。先ほどの修正主義の世の中に生きていく若者たちにとって、正解はこれなんだよっていう形の教育だけでいいのかということ考えたときに、子供たちは子供たちのそれぞれの生きている社会的な文脈があるわけですし、その中で学びの必要性に気づかせることが、もう一つの学びに火をつける方法ではないかなというふうに思います。社会に生きる自分らしい自分自身の学びに気づけば、学びというものに憧れが生じるということでもあります。

じゃあ、そのために具体的に何をしたらいいかということなんですけど、一番大きなことはいろんな人とかかわらせるということだと思います。今の高校生は学校と家庭を歩き来してるのみですから、親、保護者、教員以外の大人を余り知らない、世の中をよく知らない

# 人と関わる

- 親・教員以外の大人と出会う
- 価値観・考え方の多様性に触れる
- 他者と対話する
- 新規な世界に自分をすりあわせる

## 島根大学に触発された 高校生

### その10年後



松江東高 → 島根大学生物資源科学部生命工学科 → その後

- 科学の**最新線**を**体感**できた経験は大きい。  
大学受験までまるまる2年間もある → 2年もあれば人は変わる。  
科学に対して**本気**になる時期が人より早かったのは、大きなアドバンテージである。
  - SSHでの活動、先生方の熱意と指導力のお陰で、生物の成績が飛躍的に向上した。
    - 生物学を習い始めたのと、生物学に**興味**が湧いたのが同時期であったのが良かった。  
ヤル気 + 先生のスパルタ指導 = 成績は最初からウナギ登り
    - 高校生物なら誰にも負けられない! という**プライド**は、浪人時代の支えになった。  
高校生物の問題で俺に解けない問題は、誰にも解けない、  
ここまで自力出来る科目が1教科でもあるのとないのとは、全然違うと思う。
  - 最後まで諦めずに**挑戦し続ける姿勢**
  - 新規殺虫剤ピリダリルの作用機構の解明
- 進学先 島根大学生物資源科学部生命工学科  
奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科修士課程
- 就職先 トヨタ自動車株式会社物流管理部物流エンジニアリング室

い。もっと良質な大人、悪い大人もいますから、良質な大人との関係性を構築してやる必要があるのではないかなというふうに思います。

### 3) 大学に触発された学生の歩み

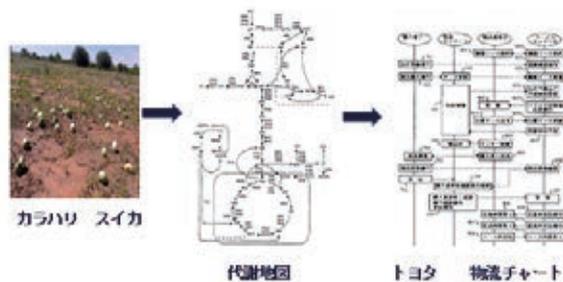
#### 島根大学に触発された高校生 その10年後

今から2つの事例を紹介しますが、これは高校生あるいは大学生が良質な他者との出会いによって学ぶ力を高めていった、そういうお話です。一つは、島根大学にお世話になった若者の話なんですけども、これ、今から10年前、松江東高の2年生のときの彼の写真です。生物資源科学部の中川先生の研究室で実験をしている様子です。この彼が10年後にどうなったかっていうことをお話ししようと思います。余り大きな声で言えませんが、高校の成績はこの時代は非常に悪くて勉強に苦勞してました。将来どうするのって、いや、僕は花火師になりますとか言っていましたね。彼が大学、島大での実験、その他、大学の先生の授業等で変わっていきます。これは彼が自分なりに自分史をまとめたものの一部ですけども、やはり高校時代に科学の最先端に触れたってことは自分にとってすごく大きいんだと。そこで、科学に対して本気になるのかなという気が起こってきた。ここが出発点です。残念ながら現役では合格できず、一浪して生物資源科学部の生命工学科に入学します。ここでもいろいろいたずらをしてたようなんですけども、御迷惑をおかけしたんじゃないかと思いますが田丸君っていいんですけどね、御存じの方いらっしゃるかもしれませんが。しっかり生命科学といいますか、遺伝子に関する研究を大学で重ねまして、僕はその研究をきわめるために大学院に行くということで奈良先端科学技術大学院大学に進学します。

#### 行動力と発想力が切り拓くトップ企業への道

そこで彼が取り組んでいたのは、カラハリスイカっていう砂漠に生えるスイカの研究をしてました。このスイカは非常に高温、光も強いところでもちゃんと生育してるっていうことで、抗酸化作用の強い物質をつくってる

#### 行動力と発想力が切り拓くトップ企業への道



私にとっては

**どの段階もかけがえのないもの** であり  
**その全てが今の私を形作っている** と  
実感しています

## 地域課題に触発された 高校生

### 1年の歩み

#### 松江北高校「地域課題解決型」キャリア教育

なぜ学ばなければならないかを理解し**本気で学ぶ**



模索する中で、自分に必要な**“学び”**に**気づく**



どうしたら解決できるか、糸口を**模索する**

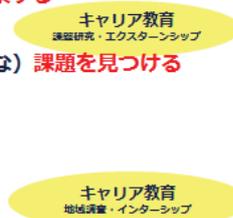


自分の言葉で物語る (authenticな) **課題を見つける**



私が生活している地域を**認識する**

- ・私、身近な人が困っていることは何か
- ・どんな課題を抱えているか
- ・今、誰が、どんな取組をしているか



そうでした、その代謝について勉強をすることをやってみました。そのままバイオ系の研究者になったかっていうとそうではなくて、これが彼の私はすごいとこだなと思うんですけども、左側、カラハリ砂漠のスイカの写真です。そのメタボリックマップの一部がこれなんですけども、こういう研究をした。これがあるとき、これはロジスティックだということに気づいたんだそうです。細胞の中で物質がいろいろ運ばれていって、変わっていき、ある目的となる物質に変わっていき、製品が、部品があちこちからやってきて物がつくられる、ものづくりのロジスティックなんだと、そういうふうに突然見えたんだそうです。そこから、じゃあ、自分はものづくり、ロジスティックにかかわるような仕事がしたいということで、これはトヨタの物流チャートの一部ですけども、ここへ行こうという発想で入社試験を受けて一発合格をして、今、トヨタの物流関係の物流管理部物流エンジニアリング室というところで研究者として生活をしています。花火師がトヨタに勤めてるとのことなんですけども、その過程の中で、やはり良質な大人、島根大学の教育力に出会ったことが彼をものすごく大きく変えたと私は思っています。彼自身もこういうことをメールに書いてきまして、こんな言葉を聞くと教育者としてはとてもうれしいわけなんですけども、やあ、先生方の僕に与えてくれたことが一つ一つ今自分の中で確実に花開いてますとか何か言ってくれるわけですよ。ああ、そういうふうに育ってきたんだなということを感じます。

これが一つの若者たちの育ちの姿だと私は思っています。必ずしも、いわゆるスコアはよくない。よくないですが、心の中に学びに対する何か種といますかね、そういうものが植えつけられて学びに真っすぐ向き合っただけで伸びていったと。あるときのぱっと瞬間、気づいたことが、ひらめいたことが一生の仕事につながってきてると、そういう若者であります。

#### 4) 地域課題研究に触発された生徒の歩み

##### 松江北高校「地域課題解決型」キャリア教育

次に紹介するのは、これ、今、松江北高校で取り組んでいる取り組みのお話でございます。昨年から1年生を対象に地域課題解決型キャリア教育と、私、勝手に名前つけてますが、そういう展開をしています。まず地域を認識させる、その中で課題を見つける、課題を解決するための糸口を模索する、その中で必要な学びに気づく、本気で学ぶようになると、これが作業仮説です。なぜそんなことを始めたかっていうと、一番上です。本気で学ぶ生徒にしたいと、主体的学びって言う言い方をしますが、私、あんまりその言い方好きじゃなくて、とりに行く学びって言う言葉を使っていますけども、そういう生徒にしたいという目的でこういう取り組みを始めました。一番重要なところは、既存のものに、調べ学習とか、あるいはインターンシップとか取り組むだけでなく、彼らの発想で何かやらせてみる。インターンシップに対してエクスターンシップという言葉が使えるんじゃないかと思うんですが、そういうことが重要だと思っています。

やってみてどうだったかと。1年生全員、320人全員に取り組みさせるんですけども、意識の変容、ごくわずかな変容ですけども、この2.5のところは平均値でありまして、この左側がやる前、右側がやった後なんですけども、少し右にシフトしてる、わずかですよ。効果はあるんだなということを感じます。一番下の地域課題の解決に自分もかかわりたいという意欲を持てると、ここも右にシフトしていますが、このあたりがもう少し大きく動いてくれるといいかなというふうに思っています。

##### 地域課題研究の流れ

これが具体の流れです。たくさんの大人の人に来ていただいて話を聞かせる、やりとりをさせるっていうシーンをつくっています。フィールドワークと書いてありますが、これはもう勝手にどっかへ行ってこいと、アンケー

トをとるなり話を聞くなり、もうどんどん行けということで出かけさせます。苦情の電話もいっぱいかかっていますが、それはそれとして、もうとにかく思い切ってどこでも行けということで取り組ませています。これはことしの1年生が取り組んでいる課題の一部です。大体、1グループ6人ぐらいのグループでやるんですけども、彼らが見出したそれなりに自分たちで取り組みたいと掲げてる課題の一覧であります。

これ、藤原先生のワークショップの様子です。職業人講話の様子です。これは先日行われました成果発表会、ポスターセッションの様子です。こういう形で、生徒あるいは外部から来られた方とのやりとりをしています。これはつくられたポスターの一部です。これ1年生です。これぐらいのものはつくりますよ。内容はともかく、見てくれよく上手につくりすし、内容もそこそこ突っ込んだ内容のものがあります。

これが昨年、昨年は手書きでやらせてましたので、昨年のポスターの最優秀をとったグループでありまして、松江の英語力を高めることによって国際文化観光都市としての松江のホスピタリティを高めようと、そういう取り組みを提言したポスターであります。このグループは提言しただけじゃなくてやらせろと言いましてね、じゃあ、やってみたらってということでどんどん外に出かけさせました。自分たちのつくったプログラムで小学校で英語の授業がしたいということで、これは附属小学校の3年生に彼らが外国語活動をしている写真です。全く教員はノータッチです。彼らがつくったプログラム、松江を題材にした英語活動のプログラム。生徒たち、子供たち、非常によく活動してくれました。これはそのときの新聞記事です。

### 世界を視野に入れた学びを求め始めている

やってみますと、まだまだ英語力が足りないとか世の中が見えてないとか気づき出すわけですね。それで取り組んだグループのメンバーの数は、春休みにアメリカの東海岸

- 教育 □ 大学進学において、県外の大学に進学し帰って来ないのはなぜか  
□ 松江市の学区制は必要なのか
- 政治 □ 十八才選挙権に対する若者の必要性・重要性とは  
□ 少子高齢化社会による市の課題と改善方法について
- 経済 □ Rubyを使って地域の発展に貢献するにはどうすれば良いのか  
□ シャッター商店街の課題点とこれからの課題について
- 医療 □ 医療・福祉の働く人が減らないためにはどうするか  
□ 島根県内における医療格差とはどういったものなのか
- 環境 □ 堀川の水質汚濁の原因とその解決策は  
□ 松江の環境と今後の発電をどうしていくか
- 観光 □ 松江城が国宝となった今、私たちにできることは何か  
□ 松江の地産地消の料理を全国に広めるにはどうしたらいいか
- 文化 □ 伝統芸能ほどのような形で今の私たちに受け継がれてきたのか  
□ 方言の未来はどうなるのか

### 地域課題研究の流れ

- 1) 市役所職員による地域課題の現状に関する講義
- 2) 取り組みたい課題を探す
- 3) 情報編集力を高めるワークショップ
- 4) 地域課題に関するフィールドワーク
- 5) PTAのOB・地域の有志による職業人講話
- 6) 調査のまとめ、提言まとめ
- 7) 発表原稿・ポスター作成
- 8) ポスターセッション
- 9) 市長提言・課題解決実践演習

### 地域課題研究 実施前後の意識の変化

評価(1~4) 中間値 2.5	2.0	2.2	2.4	2.6	2.8	伸び
	●(実施前) → ●(実施後)					
地域の抱える問題について興味をもったり意識したりしたことがある		●			●	0.46
身近な問題について話し合ったり考えたりすることは好きである			●	●	●	0.27
他者と話し合いをしながら意見をまとめて発表する授業は好きである			●		●	0.27
地域の課題解決に自分も関わりたいという意欲をもっている			●		●	0.25



へ研修旅行に出かけました。たくさん生徒がいますけど、この中の9人が松江北高の生徒でして、これはハーバード大学で、日本からハーバード大学に留学してる学生たちとのセッションをしたときの写真であります。自分に足りないことはやっぱり自分でとりに行くようになります。必要な学びをとりに行くようになる。

さらに、2年生になりまして、もっとやはり社会に直接役立つようなことがしたいということで、松江の英語力を高める、なるほど、小学生の英語力を高めてもいいんですけどすごく時間がかかると。外国人に対して直接話ができるのは高齢者じゃないかということに気づきまして、じゃあ、高齢者の英語力を高めようということで、今、北高で月1のペースで高齢者を対象にした英会話教室が開かれています。これなかなかおもしろくて、自分たちのグループだけではできないのでESS部を呼び込むとか、それから、ちっちゃい子供さんが来られたときにそれをケアするためのボランティア部による学童保育なども用意します。そういうふうに分たちのやりたいことにいろんな生徒を巻き込んで動きが出てきています。これはその様子です。女子高生と楽しく英会話を勉強するおじさんであります。こういうふうにおばあちゃんが孫さんを連れてこられまして、おばあちゃんもお孫さんも一緒に英会話を学ぶと、こういうシーンであります。これ未来の北高生なんですけども、こういう形、これとてもすてきな写真だなと思います。こういうことが今展開されてるといふことであります。

1年生のときは、自分が何ができるかわかんないけどとにかく何かやってみようと、その中で、自分に足りないことに気づく、そして、もっと直接的に社会に貢献するための取り組みを始める、こういう流れが生徒たちの中にできてきているということです。これは、今、1、2、3年、各学年が掲げてる学年の指導目標なんですけども、自分から始まって、他者、社会と視野が広がっていくように子供

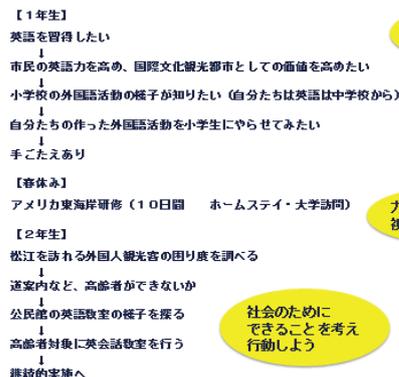


### 世界を視野に入れた学びを求め始めている

春休み	→	アメリカ東海岸研修旅行	9人
夏休み	→	短期留学	4人
秋から	→	長期留学	1人



ハーバード大学にて



たちを育てていこうということで動いています。先ほど紹介した生徒たちはまさにこの流れに乗って来てるなということを感じます。

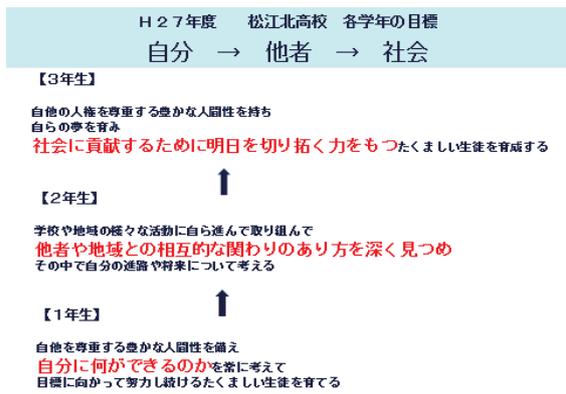
### 5) こんな生徒を入学させたい

おととい開かれた、しまね教育の日のフォーラムです。地域で活躍する若いリーダーと島根県の高校生がセッションをした場面なんですけども、若いリーダーたちの言ってる言葉と高校生の語る言葉、浜田商業高校、それから飯南高校、松江北高校の生徒たちですけども、これ非常にマッチしてると。高校生、やはり地域に出て何かやりたいと。若いリーダーたちは大人のネットワークの中に高校生活を巻き込みたいということを言っておりまして、こういった関係性から、新しい、島根らしい教育が生まれてくる予感を私は感じております。そういうふうにより地域を意識した、自分で積極的に学ぶ子供たちが、松江北高校だけでなく、島根県の専門高校、普通科高校、もうあらゆる高校で育ちつつある、そういう子供たちが島根大学に入学して飛躍してほしいなという思いでいます。

こんな高校生が受験したら合格させますか、目の前にこういう高校生があらわれたらどう思われますでしょうか。結構頼りなさそうではありますが危険な道を自分の足で歩もうとしていますよね、この人とちょっとかぶるんですけども。こういう姿を評価していただきたいなと思うわけです。つまり、ちゃんと自分の足で歩めるような強い足腰、基礎学力があって、少々のことでは転ばない経験値がある



## こんな生徒を入学させたい



#### A 基礎学力

(当面) 大学入試センター試験 + 個別試験

※ 英語は外部検定試験を利用

#### B バランス(経験値)

調査書 部活動その他課外活動の実績 集団面接

#### C 志(学問的関心・社会貢献意識)

小論文試験 学修計画

#### ※ 配点

A : B : C = 2 : 1 : 1 → 基礎学力以外の得点での逆転幅を大きく

ること。さらにちゃんと前を向いて貢献意識とか学問への関心を持って、よちよちではありませんけども歩もうとしている、こういう高校生をぜひ島根大学に送り込みたいなというふうに思います。

じゃあ、そのために何を評価するかということなんですが、基礎学力については今までも評価していただいています。英語については外部検定試験を導入することも考えられましょう。B、Cの部分、これは今まで余り評価なされてなかったところで、総合的な評価というのはここら辺にかかってくるんじゃないかなと思います。勝手に書きましたけれども、部活動その他課外活動の実績を評価するような形、それから集団面接を行うと、あるいは

小論文試験を行う、学修計画を提出させる。この赤で書いたところは、これは大学に新しく取り組んでいただきたいこと、青は、これは本人あるいは高校が準備すべきものということで、これぐらいのことをやればペンギンのような学生を入学させることができるんじゃないかなというふうに思います。勝手に配点比率まで書きましたが、A対B+Cが、やっぱり学力とそれ以外のところが1対1ぐらいになるように、学力以外のところで逆転できるような形の科目設定がいいのかなというふうに思っております。

以上、松江北高校の取り組みを中心に、私の思いも含めてお話しさせていただきました。御清聴ありがとうございました。

## 取組事例2

### 高大接続から入試改革を考える 「グローバルな視野を持って社会に貢献する 人材の育成と高大接続」

広島県立西条農業高等学校 校長 立上 良典

皆さん、こんにちは。広島県の西条農業高等学校から参りました立上と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、私に声をかけていただきまして、広島からやってまいりました。ここにたくさんの皆様方がお集まりになられまして、少しでも参考になるような事例の紹介ができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたしますと思います。

#### 1 「トビタテ！留学JAPAN」

今ここへ映っております方々は、イタリアのモデナというところの市長室に集まれた方々であります。女性の方、一番右側がカフェ・キャリアーの社長です。右から2番目がモデナ市の市長さん、その次が本校の濱崎という生徒です。その左が、その濱崎が2週間、研修を行うレストランのオーナーシェフです。その左が沖という、本校の生徒で、アグリツーリズムを研修するという事でモデナへ行っているわけであります。一番左が、そのアグリツーリズムの施設のオーナーの息子さんで、ワイナリーの責任者をやっておられる方です。このような方々に囲まれて、この2人が8月の30日から9月の16日までモデナで研修を行いました。これは文部科学省が実施しています、「トビタテ！留学JAPAN」に応募して、今年の2月からずっと資料をつくったり面接があったりということで、最終的に、全国で303名のうちの2人に選ばれて行ったわけであります。ここにそれぞれの生徒の言葉を示しておりますけれども、アグリツーリズムについて学びたいと、自分の家は広島市の豊栄町の牧場であるけれども、小学校、中学校の減少が進む中、地元の豊栄



2 SSHにどう寄り添ったか3年間 畜産科3年 佐藤太紀

研究テーマ「鳥類の性決定・性分化に影響を及ぼす要因についての研究」

年度	学年	月	研究会・研究会等
平成31年	1年	3月	日本動物学会14回年大会(大分県大分市)
		4月	中国動物学会14回年大会(中国)
		8月	平成31年度「アグリツーリズム」大会(広島県)
平成32年	2年	3月	日本動物学会15回年大会(大分県大分市)
		7月	第1回日本動物学会-日本動物学会-日本動物学会(中国)
		12月	第1回日本動物学会-日本動物学会-日本動物学会(中国)
平成33年	3年	3月	第1回日本動物学会-日本動物学会-日本動物学会(中国)
		7月	第1回日本動物学会-日本動物学会-日本動物学会(中国)
		11月	第1回日本動物学会-日本動物学会-日本動物学会(中国)

町の将来のことが非常に心配だと、どうやって中山間地域に人を集めればいいのかということのヒントを学びたいというのがこの沖という男子の動機であります。濱崎のほうは、イタリア料理の味や美しさを育んだ風土や文化を見たいと、イタリアと我が国の文化が融合できたらおもしろいんじゃないかと言っております。

このモデナという都市は、イタリア北部のボローニャに隣接しておりまして、人口がおよそ18万人、ミラノより少し南のほうになるんですけれども、大体松江と同じぐらいの規模であります。ここで有名なのがフェラーリ社の本社があるということ、あるいはオペラ歌手のルチアーノ・パパロッチの出身地であるということ、さらにバルサミコ・ピネガーを、御存じだと思いますが、これが倉庫というか蔵であります。これがパルミジャーノ・レッジャーノということで、パルメザンチーズという言い方をしますけれども、ここがその有名な産地であります。これが世界的に有名などいいますか、オーストラリア・フランチェスカーナという、全世界のレストランのランキングで大体五指に常に入るような有名なレストランです。こういうところへ行ってこの2人が研修したということをお一つ御紹介します。

## 2 SSHにどっぷり漬かった3年間

もう一つ、これは本校の佐藤という生徒ですが、入学した時からいろいろ研究テーマを探っていたわけですが、この生徒は平成24年のSSHの指定の翌年入学しまして、動物の性について興味を持って、爬虫類はふ卵温度の変化によって雌雄が揺れるように、鳥類にも同じことが言えるんじゃないかという仮説を立てて研究を重ねてきております。特に大きかったのは、2年生のときに朝日新聞が行っている「高校生科学技術チャレンジ」で最終審査の30名の中選ばれ、あと一歩でアメリカのピッツバーグで行われるISEFに行けるところまで進んだんですけれども、残念ながらそこまでは行けませんでした。こ

の生徒は3年間一生懸命その研究をして、いろんな面で、プレゼンテーションも非常に素晴らしいものをしてもらえるようになっていきます。

このような3人の生徒を紹介させていただいたんですけれども、高等学校の教育というものか、あるいは大学の教育へつながっていくのか、あるいは高等学校でどのような生徒を育てているのか、その高等学校で育てた生徒を大学でどのように評価していただけるのか。今のこの3人を、大学関係者の皆様方はどのように捉えてどのような方法で評価していただけるのかということが私の発表の主要なテーマであります。

## 3 SSH指定3年間の成果—育成する生徒像—

4年目になりますけれども、このような生徒を本校では育成しているということでまとめました。一つが、3年間の学びを通して将来の職業・生き方を選択できる生徒、2つ目として、高いプレゼンテーション能力を持って自分の研究内容を通してグローバルに交流できる生徒、3つ目として、現代社会の抱える問題の解決を目指して科学技術を通して社会に貢献できる生徒、そういう生徒を育てているつもりです。

## 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発

これが本校の全景であります。このあたりとこのあたり、これが本校の農場と校舎です。ここが広島大学の農場になります。ここが広島中央サイエンスパークで、この3つの学校、施設が隣接したところにあり、いろんな意味で研究を進めていくに当たって有利な条件に恵まれているということが言えます。そのほかに、本校の特色としまして、海外連携について、平成元年からタイ王国あるいはニュージーランド等と連携をずっと進めてきたという歴史を持っております。あるいは、農業高校の強みを生かして、全校生徒を対象にしてSSHの取り組みを行っているということです。さらに文部科学省のいろいろ事業の指定も受けており、事業にかかわっての学校としての推進体制が整っていると、あるいは大学

進学に力を入れてきた歴史を持っております。平成に入ったころから、農業高校ではありませんが、地域への就農といえますか、担い手育成ということについて、非常に厳しい現実の中で、当時の校長が、大学へ行って農業を学んで農業と関係のある仕事へ就けということで、国公立大学へ行かせることに力を入れて進学実績を上げていくという方向性をとってきて今に至っているということでもあります。今申し上げたような学校としての特色を生かして、平成24年度からSSHの指定を受けて取り組みを始めました。また後でゆっくり見ていただければと思うんですけども、かなりいろんな取り組みを、組織的、有機的に行って生徒の力を伸ばしてきています。

### 5 本校SSHの研究開発課題

これがキャリア教育的に捉えた場合の流れでありますけれども、自分の興味、関心に基づいて入学して研究テーマを設定して、大体112の研究グループが2年生、3年生で並行して研究を進めていると言えます。さらに、それをパワーポイントにまとめてプレゼンを行ったり、あるいは英訳を全ての生徒にさせて、英語でプレゼンをさせたりしております。そして、それぞれが自分が研究を進めたいという、そういう道を選んで進学していく、あるいは自分の進路に進んでいくということでもあります。

これがその科学技術リテラシーということで、SSHの指定を受ける前の年にいろいろと研究をして学校として取りまとめたものです。今申し上げた112の研究テーマのうち、特に大学の先生に指導していただいたり、あるいはSSHの予算を分配するというので、28の研究テーマを重点研究テーマとしてまとめて行っています。

これは地元の中学生、小学生、あるいはSSHの指定校である広島大学附属高等学校との連携の様子です。海外交流、さっき申し上げましたように、これまでの流れからいろんな面で積極的な展開を行っているわけですね。

### 3 SSH指定3年間の成果 – 育成する生徒像 –

#### (1) 3年間の学びを通じて将来の職業・生き方を選択できる生徒

SSH指定の年に入学しSSHの教育課程で3年間学んだ最初の卒業生が、この春、卒業した。3年前に入学した生徒は、自分の興味関心に基づいて課題を設定し、それを3年間研究、その研究をさらに深めようと大学等の具体的な進路を選択して、将来の自分の職業・生き方につながるという意欲をもって本校を飛び立った。

#### (2) 高いプレゼンテーション能力を持ち自分の研究内容を通してグローバルに交流できる生徒

彼らは、この3年間、自分の研究を整理し、自分の考えを自分の言葉で説明する、英語に翻訳してプレゼンを行うという訓練と経験を積み重ねることにより、多くの生徒が人前で堂々と発表することができるようになってきた。海外連携の成果は、一部の生徒に留まるのではなく全体に波及し、生徒は大きく成長している。

#### (3) 現代社会の抱える問題の解決を目指し科学技術を通して社会に貢献できる生徒

生徒の研究は、本校で農業の専門教育を受け日々実験・実習に取り組む生徒たちが、その学習活動の中で抱いた問題意識を起点として、その解決のために日々取り組んできた研究である。したがって、その研究は、現代社会が抱える農業・食料等の諸問題を解決しようとする明確な目的を持つものであって、将来の我が国における社会貢献につながる。

### 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発

#### (1) 恵まれた立地条件と高大連携の実績



### 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発



### 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発

- (2) 海外連携の実績
  - 広島大学、JICA等を通じた多様な国際交流
  - 平成3年度～ タイ王国研修 (平成10年度まで10回)
  - 平成12年度～ ニュージーランド研修 (平成15年度まで4回)
  - 平成18年度～ 第2次タイ王国研修 (平成19年度まで2回)
- (3) 農業高校としての強み
  - 全校生徒を対象とした専業農研が可能
  - 専門科目「課題研究」を有効に活用
  - 農業の専門教育に携わる多数の教員の配置
  - 農業高校拠点校としての充実した施設・設備
- (4) 研究開発の実績と推進体制
  - 平成15年度～17年度 文部科学省指定「研究開発学校」
  - 平成19年度 日本学校農業クラブ全国大会広島大会実施
  - 平成20年度～22年度 文部科学省指定「目指せベストハイスクール」
  - 平成24年度～ 文部科学省指定「スーパーサイエンスハイスクール」
- (5) 大学進学に力を入れた進路指導の実績
  - 国公立大学 30人 4年制大学 50% 進学 80% 就職 20%





けれども、やっぱり研究内容を、さっき申し上げたような形で海外へ行って、アメリカへ行って発表して聞いてもらおうと、そういう動機づけといますか、目的というものを持って、勉強することを通して、非常に力が伸びているんだということを紹介してもらっています。それらの評価についてもいろいろと手法を用いながら評価を行っているわけでありましてけれども、ルーブリックを使って、特に学校設定科目についてこのような形での評価を行っています。

## 7 SSH研究開発中間発表会

また、5年間のSSHの指定であります、その中間年であります昨年11月に、今から1年前ですが、中間発表会ということでアメリカのイリノイ州立大学の学部長に来てもらったり、あるいはアメリカ大使館の農務官に講演をしてもらったりしました。これは県内のSSH、SGHの指定校、加えてイリノイ州立大学の学生でパネルディスカッションを本校の生徒が中心となって行ったというものでありますし、これは英語で研究発表を何人かの生徒にさせた場面であります。

## 8 SSH研究開発の効果

進路への影響としてここへ示させていただいておりますが、非常に顕著な変化が現れているということが言えます。学科特性に応じた、あるいは研究テーマに応じた進路を選択するようになっていったというのがこのグラフからわかりますのと、国公立大学を中心として、学習に対しての、あるいは進路に対しての高い目標を設定して、それに対して努力していこうという傾向をはっきりと示していることが言えます。

## 9 貧困問題は途上国だけの問題ではない

これはSSHの指定を受けた年に入学してきて、この春卒業した生徒がJICAの作文に応募して賞をもらった作品です。ここで彼女が言ってるんですけども、外国に行くということは異文化を受け入れて尊重し調和することである。アメリカにも家族のホームレスがいて、行ったときに見た。貧困問題は決

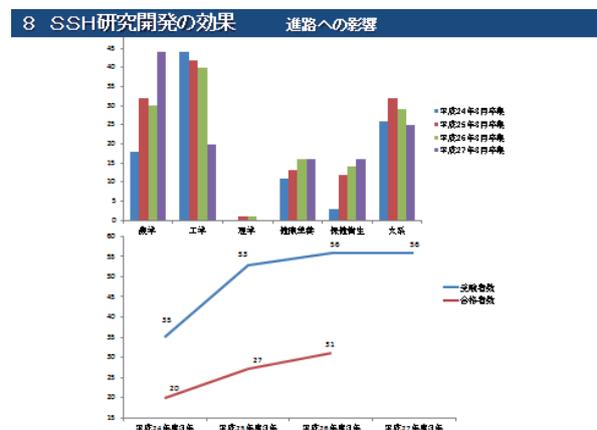
して途上国だけの問題だけではないと。あるいはマラウイの子供、これは実際に行った方からの講演を聞いたときの写真を見ての感想なんですけれども、子供たちの目が非常に生き生きとしていた。本当の幸せってというのは何なんだろうかと。自分は大学で一所懸命英語をさらに学んで、卒業したら青年海外協力隊で発展途上国の農業の支援をしたいと、卒業したら実際にそのような活動をする経験を通して、さらに農業の教員になって生徒にそれを教えていきたいんだという目的を持って、この春大学へ進学していきました。

## 10 「確かな学力」とは

このような生徒を育てていくということが、今、言われています「確かな学力」ということで全体を考えたときに、非常に本校の取り組みは、それを意識した取り組みにしているつもりであります。

## 11 確かな学力育成のための取組スケジュール

SSH、あるいはSSHの取り組み以外にこのようなことを考えながら、実際の取り組みを進めておりますけれども、これが今示させていただいた中身をガントチャートにして示したものであります。ほとんど読めませんが、3年間のガントチャートでかなり大きなデータでありますので、つくって教職員で共有しながら進めています。



## 12 主体性を持って学び続ける人材を育成するために

最後に、今申し上げたような取り組みを本



### 取組事例3

## 高大接続から入試改革を考える

### 「期待する学生像・育てたい学生像からみた入試改革への期待」

島根大学 地域未来戦略センター長  
生物資源科学部 教授 松崎 貴

よろしく申し上げます。松崎でございます。  
今、お二人の校長先生から高校の事例について御報告いただきましたので、私のほうから大学の事例につきまして、私が所属しております生物資源科学部並びにこの3月まで勤めておりましたキャリアセンター、地域課題学習支援センター、それから今の地域未来戦略センター、これらの経験をもとに少し御紹介したいと思っております。

きょうのお話は、まず大学がどういう受験生を求めているのかということ、その評価についての話、それから私が今後入試においてどういうことを考えていく必要があるのか、どこら辺を考えているのかといった話を御紹介したいと思っております。

#### 島根大学の求める人材像

もう何度も出てきております、島根大学のアドミッション・ポリシーですけれども、上で大学の目指す教育の内容が書いてございます。それと直接ではないですけど対応するような形で、このような人材を求めていますというふうに書いております。このほかに各学部学科では、さらに具体的な内容を書いているわけで、ここでは生物科学科のアドミッション・ポリシーを持ってきたものですが、最初にどういう内容の教育をするかっていうことを書いておまして、そのために基礎学力を備え、強い意欲を持ち、それから科学的な好奇心に富んだ人を求めていますということで、入試の形態ごとに、一般入試では、推薦入試では、それからAO方式でやっております地域貢献人材育成入試では、ということを書いております。多様な入試があるのでそれぞれ

平成27年度大学改革シンポジウム  
「大学入試改革」どう変えるのか

### 期待する学生像・育てたい学生像からみた入試改革への期待

国立大学法人 島根大学  
地域未来戦略センター長  
生物資源科学部教授  
松崎 貴

#### コンテンツ

- ・ 島根大学が求める人物像
- ・ 大学で学ぶためのジェネリックスキル
- ・ 探究心や地域貢献意欲をどうやって評価するか
- ・ 大学で育成するコンピテンス
- ・ 卒業研究で化ける学生
- ・ 就業力の育成とその評価
- ・ イノベティブ人材の育成
- ・ 減点式評価と加点式評価
- ・ これからの大学入試に必要なもの

#### 島根大学の求める人材像

島根大学が目指す教育は、次のとおりです。

- 自然のしくみ、社会の歴史と構造、豊かな学術文化、人間への理解を深める教育
- 幅広い知識、広い視野、総合的な判断力を身に付け、豊かな世界観をまぐくむ教育
- 自らの社会的役割に対する自覚を深め、現代社会を担う専門的力量を高める教育

島根大学は、主体的に学び、自らを高めようとする人を求めます。

- 自然、社会とその歴史、学術文化、人間への理解を深めようとする知的な好奇心が旺盛な人
- 人と社会へのつながりを大切に、専門的力量を高めようとする人
- 地域及び現代社会の諸課題に目を向け、積極的に関わろうとする人
- 高等学校段階の基礎的な学力を十分に身につけ、入学する学部・学科で必要とする教科・科目で優れた学力を有する人

生物科学科では、多岐にわたる生命現象を、生物集団から個体、細胞、さらには分子に至る種々のレベルから捉え、理解する能力を育むことを目標としています。

そのために、学生の皆さんが、

- (1) 様々な生物科学の知識を統合し、自ら設定したテーマを実験・観察を通して主体的、多面的に探究すること、
- (2) 研究成果を発表し、互いに議論を交わすこと、
- (3) 生命現象を科学的に学び、探究する者として果たすべき社会的責任について考え身につけること、

ができるようなカリキュラムを編成し、教育を行っています。

このカリキュラムにおいて十分な学習成果をあげるために、生物科学科では高校までに習得すべき**基礎学力を備え**、生物科学を学ぼうとする**強い意欲を持ち**、生命現象を深く探究しようとする**科学的な好奇心に富んだ人**を求めています。

特に、**一般入試**では「生物」を含めた**基礎学力が総合的に優れた人**を、**推薦入試**では**優れた学業成績に加えて、生物科学の様々な分野への強い探究心を持つ人**を受け入れます。

**地域貢献人材育成入試**では学業と人物が優秀で、生物科学の学習と研究の成果を通して、将来、地域社会の発展に寄与したい人を歓迎します。

に分けて書いておるわけでございますけれども、大学がどういう力を求めているのかっていうのをすごく大ざっぱに分けますと、一つは必要な知識という部分、もう一つは意欲の部分なんだと思います。それと、学び続ける力っていうものがあると望ましいと。これに加えて、昨今では汎用的な学修能力いわゆるジェネリックスキルというものが必要だというふうに考えられている。ですから、こういう三つの力を求めていきたいというふうになってきているかと思えます。

しかし、先ほどのアドミッション・ポリシーの中で、受験生が何をどこまで身につけておかなければいけないのか、あるいは我々がそれをどういう比率で評価するのかといったところは明示されていないわけです。その理由はいろいろございますけど、一つは入試形態が多様でございます、前期、後期があります、推薦もあります、AOもございます。それから、入ってくる学生さんたちの入学目的というのもさまざまです。そういった中で、これを統一して書いていくということがなかなか難しいということが一つある。またその評価をどうするかっていうところのコンセンサスがまだきちりとはできていない。そういう中で具体的に書いてしまうと、逆にそれ以外のところは要らないんじゃないかというような誤解も生じてしまう。そういうことがあって、なかなか具体的な内容になってない部分があるかと思えます。

### 大学で学ぶためのジェネリックスキル

先ほどちょっと紹介いたしました、大学で必要となるようなジェネリックスキルというのは国によって多少考え方が違うところありますけれども、それほどぶれていないですね。例えば思考力とか問題解決力といった知的な能力の部分、それからチームワークとか、協働といいますか、協調性のようないわゆる社会的な能力、それに加えて情報の活用力も含めてのコミュニケーション能力と、こういうものが大きくジェネリックスキルと呼ばれるものだというふうに言われております。

### 探究心や地域貢献意欲をどうやって評価するか

これらを入試の中で測っていき、評価していきとするわけですが、一般的に知識の部分っていうのは筆記試験でもある程度評価できるだろう、それも客観的に評価できるだろうということになってきておりますが、例えば意欲の問題ですね、地域貢献意欲とか、あるいは探求心といったものをどうやって評価するかっていうのは、そんなに簡単な問題ではないというふうに思います。筆記試験でも、例えば問題の内容を工夫することである程度は把握できるでしょうけど、多くの場合、例えば面接など、志望理由の背景について深く質問してみたりとか、それから日ごろの興味とか学習習慣について質問してみたり、あるいは幾つかの問題が重なるような、複合問題のようなものでその意欲を見てみたりと、あるいは探求心を見てみたりと、そういうことを重ねてきているわけでございます。今年初めて、地域貢献人材育成入試ということを行いました、本学部の場合、プレゼンテーションというものを取り入れました。その中で問題意識とか提案の深さというものが本物であるのか、借り物ではないその本人の力っていうのが見られるのではないかということで行いましたけれども、皆さん熱のある発表でしたが、やっぱりその中にも強弱ございまして、浅い深いもございましたので、ある程度こういう方法でも評価できるのではないかというふうに思っております。

### アドミッション・ポリシーの明確化

文科省の高大接続特別部会のほうの資料では、評価する能力と評価する方法との間にこのような関係があるんじゃないかというようなまとめをされております。例えばいわゆる試験で、記述式、論述式の試験等を含めても、知識は問うことはできても、例えば主体性とか、ここにあるような公共心とか、気持ちの問題、それからチームワーク、リーダーシップといったジェネリックスキルの問題っていうのはなかなか評価できないだろうと。その分は先ほどお話ししましたように、この面接

を中心にやっているっていうのが現状だと思います。一方、最近企業さんで就職試験のときに集団面接をかけるところが増えてきております。恐らくその中でチームワークとかリーダーシップといったようなのを含めて、ジェネリックスキルというものを評価しようとしている。先ほど、泉校長のほうからも集団面接を入れてほしいという話がありました。これは実施するのは決して簡単ではないと思うんですけども、そういうものを取り入れることによってこういうさまざまな能力、特にジェネリックスキルのところを評価することが比較的容易になるだろう。あるいはプレゼンテーションですね、先ほどもAO入試のところで取り入れたということがございますので、こういうものの組み合わせっていうものが必要になってくるだろうというふうに考えています。

### 大学で育成するコンピテンス

これまでの大学が培ってきたといえますか、育成してきた能力、コンピテンスというものは大きく分けると、このA、B、C、Dという四つの領域になるというふうに言われております。このうち、従来、A、B、Cの三つの領域についていろいろと教育をする、その中で、学部特性によりますが、例えば医学部とか教育学部のような目的学部の場合はこのB、Cを主に教えている、それ以外のところはA、B中心かなというような分類になるそうですけれども、こういう形で展開されてきたものでございますけれども、社会の要請ということで考えると、より社会的な内容が強い、あるいは一般性の高い、このD領域っていうものを力をつけさせてほしいと、つけてほしいという要求が最近大変強うございます。そういうこともあって、この学士力とか、社会人基礎力という形で表現されるような、この汎用的なコンピテンス、これが先ほど来お話ししてるジェネリックスキルということと一緒にするかと思いますけども、こういうところをつけさせるということが大変重要になってくるというふうに考えています。

【求めているもの】

- 大学で学ぶために必要な知識
- 学ぶ意欲と学び続ける力
- 汎用的な学修能力(ジェネリックスキル)

しかし、受験生が何をどこまで身に付けておかなければいけないかは明示されていない



- ・多様な入試(前期/後期/推薦/AO)
- ・多様な入学目的
- ・統一した書き方の難しさ
- ・具体化することでミスリード

### 大学で学ぶためのジェネリックスキル

国	オーストラリア Mayer Key Competencies	英国 (NCVQ) Core Skills	カナダ Employability Skills Profile	米国 (SCANS) Workplace Know-how
知的コンピテンス	情報を収集し、分析し、整理する 数的スキル 問題解決力	生涯学習力 数的スキル 問題解決力	思考力 数的スキル 問題解決力 意思決定力	思考スキル (創造的思考、判断、問題解決) 基本スキル (読み書き、算学、対話)
社会的コンピテンス	他者との協働 チームワーク	他者との協働	責任感 他者との協働	チームワーク リーダーシップ 責任感
コミュニケーション・コンピテンス	アイデアと情報の伝達 技術の活用	コミュニケーションスキル 情報技術	コミュニケーションスキル 技術の活用	情報の活用 技術的スキルの理解

神戸大学川崎大津大数院 調査より抜粋 (Kawaijuku Guideline 2011.11)

探究心や地域貢献意欲をどうやって評価するか

筆記試験では難しいが、それでも

- ・出会ったことのない問題に対応できる粘り強さ
- ・深く答えることも可能な問題

面接での評価

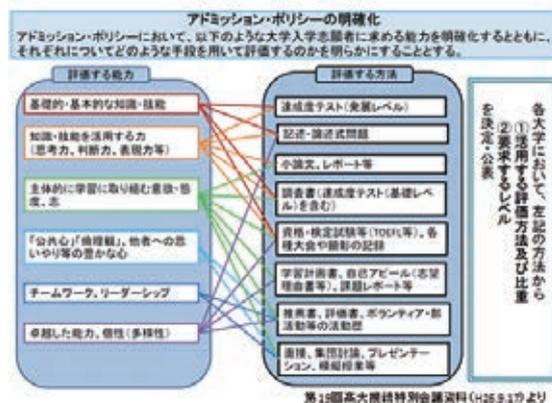
- ・志望理由の背景についての質問
- ・日頃の興味や学習習慣

持続力や柔軟性

- ・複数の分野に跨がる問題(複合問題)
- ・答えのない問題への対応

地域貢献意欲

- ・問題意識や提案の深さとリアリティ(借り物でない力)



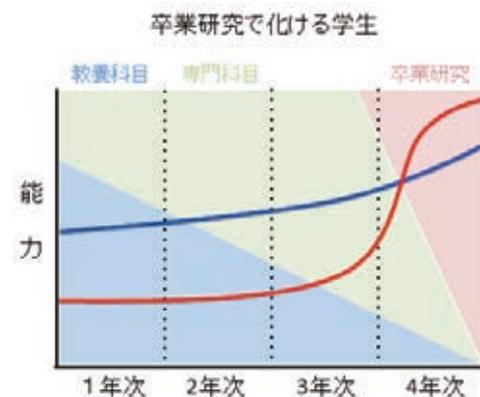
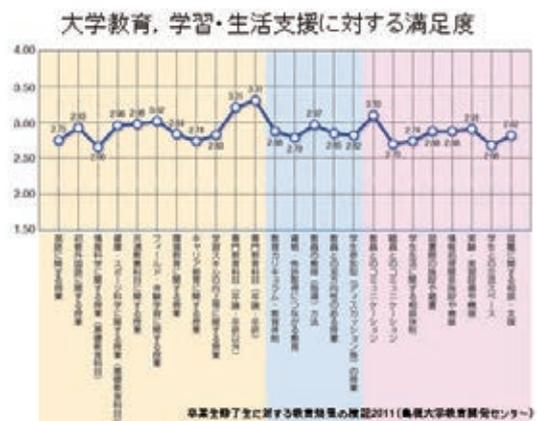
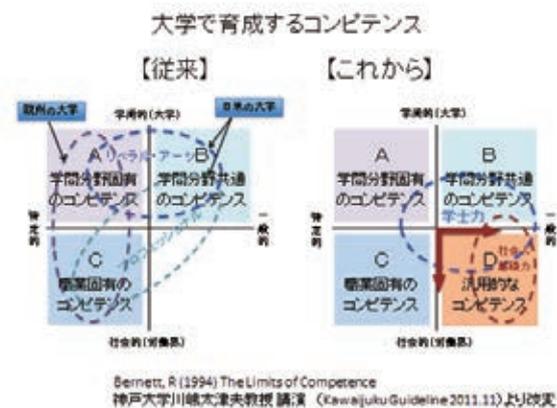
第2回高大接続特別会議議案資料(H25.5.11)より

## 大学教育, 学習, 生活支援に対する満足度

少し話が変わるんですけども、卒業生アンケートを見ますと、大学で身についたというか、大学の内容の中で自分が満足していると割合の高いものは、この二つでございます。専門的教育科目ですね、左側が卒論、卒研以外で、右側が卒論、卒研。ここは従来大学が一番得意だった教育内容だと思いますし、学生さん、卒業生さんで、この力がついたといいますか、ここの満足度が非常に高い。特にこの卒論ですね、これの満足度が高いというのが、今の日本の大学、大体どこでもそういう傾向なんじゃないかというふうに思います。これはなぜか。恐らく彼らが自分自身で納得できるような内容の学習ができて、またその達成感があるってということだろうと思います。実際に、ある程度初めから能力の高かった学生でもなかなか伸び悩みっていうケースもあれば、一方、3年生ぐらいまであんまりぱっとしないんだけど、卒研に入ったらものすごくレベルが上がって、どんどんどんどんもう先に進んでいってしまうという一、いわゆる化ける学生さんがいるっていうことは、多分多くの先生方、実感として持っておられると思います。

### 卒業研究で化ける学生

じゃあ、どういう学生さんが化けるのか。いろんな学生さんおりますけれども、一人卒業生の事例紹介をしたいと思うんですけども、この農業高校っていうのは先ほど立上先生のほうから紹介ありました、西条農業から来られた学生さんです。3年生までの成績はそんなに目立つことなかったんですけども、卒業研究のテーマに、植物のトランスポーターという物質がございます。いろんな種類があって、その役割がわかると応用面が非常に広いというものなんですけども、そのスクリーニング、一つ一つの遺伝子をとってやるっていうようなことに没頭しました。同じ研究室に同級生がいて、二人で切磋琢磨してどんどんどんどん上がっていった。最終的には英語で卒論発表するというところまで行き



就業力育成支援事業(平成22年度～)



ましたし、二人とも博士課程まで進学したんですね。この学生さんは東大の大学院のほうまで行ったわけです。その後どうなったかっていいますと、この学生さんはIT企業に勤めたということで、研究者にはならなかったんですが、もう一人の同級生のほうは今、新潟大学のほうで教員として採用されています。ほかの学生と何が違ったかということなんですけれども、推薦入学で入ってこられました。そのとき、もう既に高校時代に自分でテーマを持って研究をして、その内容で県の科学賞をとっている。もう一つのことをやり始めるともうどんだのめり込むタイプであったと。ですから、ここで伸び悩んでいたというのは多分ギャップの問題はあるんだと思いますが、ポテンシャルとして学ぶ力っていうのはもう既に高校のときについていたんだらうと。だからこそ、この自分のテーマ、水の合う環境に出会った場合にはぐっと力を発揮できるんだらう。ぜひこういうタイプの学生さんを育ててみたい、たくさん育てたいなというふうに思っています。

### 就業力育成支援事業

先ほど、実は卒業生の満足度というところで少し低いところがあって、触れずに来たんですが、一つはキャリア教育でした。あのデータちょっと古いものだったんですが、そういうこともありまして、島根大学で平成22年度から就業力育成支援事業というものを始めております。これはアクティブラーニングの科目を中心に正課、いわゆる授業の科目ですね、それと正課外の教育プログラムというのを組み合わせて、ここに上げております七つの力を伸ばそうと。それによって総合的な就業力を上げようと、そういうプログラムです。

### 就業力の評価方法

幾つか科目があります。その中で身につけられる力というのが違いますが、どう評価していくかっていうところがなかなか簡単ではない。その評価方法の一つに、ちょっと見にくいですが、この青い線で書いたところ

が教員がそれぞれの力をどれだけ評価するかという、教員評価の部分。それから、学生さんが自分で一自己評価した部分が赤と。これイメージ図でございますけれども、そうすると、中にはそのギャップがあるところっていいですか、自己評価と他己評価が違うところがございますね。こういうものを学生さんが自分でチェックしていく中で、どういうふうに見られているのか、あるいは自分ではどの評価が足りたの足りなかったのっていうことがわかるという。こういうことも一つの大事な要素になってくるかというふうに考えます。いろんな科目で違う力がつきますので、これらの科目をうまく組み合わせるとることによって、キャリアデザイン力とかリフレクション力とか、七つの力をバランスよく身につけてもらおうというようなプログラムです。

### 地域志向教育から地域キャリア教育へ

これがそこそこうまくいっているということで、こういうものをさらに発展させて、いろんな学生さんにとっていただくということで、平成25年度からCOC事業に採択されて、地域志向型の教育というのを行ってきております。地域課題に立ち向かうような、アクティブラーニングの科目を入れてやってきてるんですが、この10月からCOC+という事業に採択されました。これは地(知)の拠点大学による地方創生推進事業というものでございまして、島根大学だけではなくて、島根県立大、松江高専とともに、地元のステークホルダーの方と協力して行うものですが、特徴としてはこの正課の科目のほかに、正課外のところ、こういうものも含めて先ほど七つ力を上げましたけど、ちょっと欲張って13ぐらいの力をつけさせようということを考えてます。その中でも大事になってくるのが、地域の方に講師として入ってもらような科目とか、長期間のインターンシップ、それで現場を知ってもらおうっていうことなんですけども、そこにつなげるための初年次教育科目に地域志向を入れようと、地域の力をかりて初年次教育をしようと、そういうア

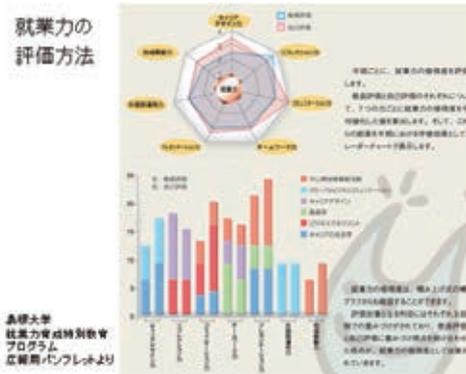
アイデアでございます。

## スタートアップセミナー

実際もう既に始まっている部分がありまして、スタートアップセミナーというものがございます。これは松江市を学びのフィールドとして、学生さん五人ぐらいのチームでそれぞれ出ていってもらう。どういう問題があるのかってということを見つけてもらうっていうのが一番のテーマ。問題解決っていうとこまで行けばいいですけども、まだ1年生ですので、まずは地域は知るといことがすごく大きな問題になってくる。先ほど、松江北高校の話がございました。テーマとしては同じようなところになってきますので、シジミの話あれば観光の話ありということになります。彼らが最終的にポスター発表という形でお互いでプレゼンをして、また新たな課題を見つけるというところでこれは終わりなわけですけども、これで触発された学生さんがさらに上の学年に行くと、また似たようなアクティブラーニングの科目がございます。中山間地域フィールド演習とかビジネスマネジメントとか、いろんな種類の授業があって、それによって大学の中ではなかなか学べないようなことも、地域の協力を得ながら学ぶっていうようなことをどんどん進めてきております。

## イノベティブ人材の育成

こうした活動、教育を通して、私たちが大学で育てたい人材の一つといいますか、これからすごく重要になってくるのはイノベティブ人材であろうと、これの養成であろうというふうに思っております。イノベーションというのは新しい方法や価値を見出すということ。方法にはいろんなものがあるかと思えますけれども、何となくイノベーションと聞くと、例えば発明とか大発見といった非常に大きなイノベーションを思い浮かべられるかもしれない。しかし、実は小さなイノベーションっていうのが非常に大事なんだろうなと思っております。日常的な生活の中でも、答えのない小っちゃな問題にたくさん出会う。



## 地域志向教育から地域キャリア教育へ

### COC人材育成コース以外にも拡大



## スタートアップセミナー

1年次～  
約400名

目的: 島根大学が位置し、今後の学習・生活の場となる松江市を学びのフィールドとしながら、高校までの受け身な学習観から転換を図り、より主体的に学修するために、他者と協働しながら大学において学ぶ力(学習スキルや社会的スキル)を身につける。

- イントロダクション
- 講義
- グループ活動体験
- 文献調査 ⇒ 課題抽出
- フィールド調査
- 追加調査 (文献・フィールド)
- ポスター発表
- 振り返り



## イノベティブ人材の養成

- イノベーション
  - 新しい方法や価値を見いだす
- 大きなイノベーションと小さなイノベーション
  - 発明・大発見
  - 日々の“カイゼン”
- 答えのない問題に取り組む
  - 1) スポンジ頭
  - 2) 考え続ける力
  - 3) 折れない心⇒レジリエンス

その都度それを解決していくってというのは、実はイノベーションでしょうと。この日々の改善というものができるとい能力が実は大事なんじゃないかと。そういう意味ではいろんな人がイノベティブ人材であり、その能力を高めるってということによって、皆さんハッピーになれるんじゃないかと。そういう人たちが我々が考えるイノベティブ人材で、何もIT企業を起こしてというような、そういう一部の人を想定してるわけではございません。

こうしたイノベティブ人材に必要なものとして、私はやわらかな頭脳、なおかつすごく吸収する頭脳、合わせたらスポンジ頭かな。書いた後に、何かこれスポンジ脳症みたいで、余りよろしくないなと思ったんですけど、言いたいことはそういう頭を持ってもらいたいなど。それと考える力ですね。我々、進化の中で、考えることってというのはすごくエネルギーを使うので、それを省略する、省エネ化するっていうふうに進化してきてるだろうというふうに思います。ですから、一度決めたことっていうのをなかなかもうそれ以上新たに考えるようにしない。それはまた、この次のところでお話したいと思うんですけど。もう一つ、この折れない心ですね。ストレスとか困難があってもめげずにやり続ける力、やり続けるための心の持ちよう、こういうものが大事だろう。今はやりの言葉で言えば、レジリエンスというものを高めていくってということになるかと思っています。

### イノベーションに最も邪魔になるものは？

ちょっと先ほどフライングしてお話ししてしまっただんですけど、私自身がイノベーションに最も邪魔になるのはこれだと思っています。先入観。この先入観のところでは先ほどの進化の話をしたと思ったんですけども、一度もう何かこれはこういうことだっていう関連性がわかったことは、我々はもうそれをルーチンにしてしまっただけで考えないようにしてしまう。これは多分進化的にはすごく意味が

イノベーションに最も邪魔になるものは？

#### 先入観

「無知の知」を失うと発想力は失われる  
 問題や答えが見つかりとそれ以外に目が向かなくなる  
 既知を知っていることがあると判断しなくなる  
 人は「成功体験」に弱い ⇒ 変えたくない

なぜ、先入観を持ってしまうのか？  
 自分の認知は正しいのか？  
 どうやったら先入観を持たずに済むか？

#### 同調化の圧力

- 他人の答えや行動が気になる
- 違う考えや答えを持っていても表明できない
- 間違えることを極度に恐れる
- 間違えたことから学ばない ⇒ 無かったことにしたい

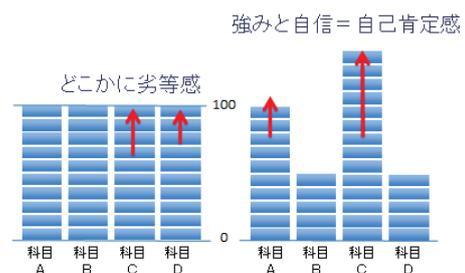


しかし、高度成長時代の品質管理行動(QC)の成功体験を引きずってしまうのでは？  
 他者への「駄目だし」による自己の地位保全も気になる

#### イノベーションを起こせる人材を育てる

- 評価方法を変える
- 自ら求める積極性(主体性)
- 価値観を変える
- 良い環境を提供する

#### 減点式評価 vs 加点式評価



あることですね。新しい課題だけをどんどん考えていけばいい。ところが、一度答えが見つかったことはもうそれ以上考えなくなるという欠点があるんだらうと。既に知っていると、もうそれ以上判断しなくなる。それから、もう一つ、成功体験にもものすごく弱いんじゃないかなと。一度うまくいったらその方法を変えたくない。こういうのはイノベーションを進めていく上で非常に問題だらうと。ですから、常にこの先入観を持ってしまう理由とか、自分が必ずしも正しくなんじゃないかなっていうことを常に問いかけるような訓練、これは訓練しないとなかなか本能に立ち向かえないと思うんです、こういう教育をしていく必要があるかなというふうに思っています。

### 同調化の圧力

それと、もう一つイノベーションを妨げるものは同調化の圧力であろうと思っております。学生さんこういう行動をされるのが結構あります。他人の答えや行動が気になってしまうんですね。違う考えや答えを持っているとしてもなかなか手を挙げない、あるいは間違えることを非常に恐れる。間違った場合になかったことにしたい、ゼロにしたい、消してしまいたい。実はここが大事ですよ。これ、恐らく若い人だけじゃなくて、我々の中にも多少なりともある感覚かなというふうに思っています。その背景には、もしかすると高度成長時代に質が高いついていうか、同じレベルで欠陥のないついでいうものをつくっていくということが大事で、それを管理する人の側もそういう能力が求められる中で、無意識のうちにこういうことが身についてしまっているのではないかなというふうに思っています。

### イノベーションを起こせる人材を育てる

また、この下のところですけども、これちょっと話は違うんですけども、間違えることを叩く文化があるような気がする。それによって、相手を自分より下に見るというか、下げる。結果として、相対的に自分が上がる

ということで、評価を上げようという、地位保全をしてるんじゃないかなというケースが間々ある。これが大きな邪魔をしてるような気がします。我々はそういうところを変えていかないといけないだらうという意味では、まず評価方法を変える、それによって主体的に動けるような学生さんを増やしていく必要があるだらう。また、学生さんだけじゃなくて、教職員それから親御さんも含めて価値観を変える必要があるだらう。それをもってイノベーションができるようなよい環境をつくっていく必要がある。

### 減点式評価と加点式評価

評価の話をしたと思うんですけども、大体日本だと100点満点からこうやって減点していくという減点方式が多いと、どっか間違ってるたびに減っていく。特に間違いの多いところを何とか底上げしていったって、できるだけ全体のレベルを平均的に上げていこうという圧力がどうもあるような気がする。そうすると、間違えたくないというプレッシャーがどうしても出てくるんじゃないのか。それに対して、最初はゼロです、とにかくチャレンジしなければ点数もらえませんよという加点方式なら、間違えたところで下がりはない。むしろ、いいところどんどん積み上げていかなければいけないとなると、得意なところをどんどん伸ばしていってもらえるだらう。こういう評価にしていくことによって、今まで、例えばちゃんといいところがあるのに、できてないところに目がいってしまって何か劣等感を持つてるという感覚から、いや、こういう強みがあります、私これなら負けませんという自信と、それに伴うこの自己肯定感っていうのを上げていきたいなというふうに思っています。

### ポジティブ心理学

こういうのはポジティブ心理学とか、ポジティブサイコロジーっていうのかと思いますけど、短所と思っていることも見方を変えれば長所だと。評価軸が1本だったら短所にしかならないけど、違う評価軸でもってくれば

それは長所にもなるよということをもっと理解していただきたい。そうすると、もう他人と比較することはあんまり意味がないですよってということになり、同調化圧力に屈しない力を身につけられるんじゃないか。人と同じでないっていうと、なかなかやっぱり不安でしょうがないです。この不安を手懐ける訓練をすることによって抵抗力を上げていくっていうのが、これから大事になっていくかなっていうのが私が感じているところです。

### 楽しみに変える、目標を見つける

これまでの教育では、初めつらくてもとにかくその基礎力っていうものをきちんとつけて、その上で初めてゲームなり、実際の応用なりっていくのが筋ですというふうに言われてたような気がします。つらいですね、この懸垂をとにかくできるようにして、腕の力をつけなければ。ところが、最初からボルダリングに興味を持った子供っていうのは、知らず知らずに体力がつくってということもありますけども、これをもっとうまくなりたいがために進んでこういうこともします。ですから、同じやるにも楽しみに変えとか、目標を見つけさせることで基礎力をつけさせるっていう方法もあるだろうと。何も基礎を全部やらせてからっていうやり方だけではないんじゃないかなということを考えています。

### 次世代リーダー

もう一つ、これからリーダーをたくさん育てていかなければいけないと言われます。でも、そのリーダーっていうのがもしかすると意識が違うんじゃないかなと思ってます。これまでリーダーって言われるのは、どちらかというとこの富士山型のワントップのリーダーのイメージで、その人のかけ声で下がきちんと動くというような形のイメージが多かったかと、カリスマ的な。ところが、今求められてるリーダーっていうのは、どちらかというと、たくさん山があるようなタイプ。みずから道を開いていける人はみんなリーダーだろうと。そういうところをまず変えていかないといけない。あるいは、我々の世代と若い

### ポジティブ心理学

短所 = 長所

他人と比べない  
同調化圧力に屈しない

不安を手なずける訓練

### 抵抗力(レジリエンス)

楽しみに変えること、目標を見つけることで効率良く基礎力をつける



### 次世代リーダー

【従来のリーダー】

カリスマ的ワントップ ⇒ 富士山型



【今求められているリーダー】

様々な分野で自ら道を切り開ける人 ⇒ 中国山地型



若者との価値観の違いに敏感に

ブランド志向や出世欲が強い

労働の金銭的対価より精神的対価

「幸福度」の尺度の多様化

### ディベート力

ディベート: 設定されたテーマの是非について、話し手が肯定側・否定側に分かれ、ジャッジを説得する形で議論を行う

- 論理性や説得の技術を学ぶ
- 「信じること」と「正しいこと」の違い
- 他人の考えを理解する
- 間違いを恐れず、失敗から学ぶ

人たちと価値観等が違うということを前提に  
 いろんなことを進めていかないといけないだ  
 ろう。

### ディベート力

それと、もう一つディベート力を上げてほ  
 しいなと思っております。日本人は、自分  
 が信じてないことの側に立って議論を展開す  
 るってことはなかなか苦手ですが、それを  
 逆転することによって非常に柔軟な頭が育  
 たらう。割と失敗を恐れるんですけども、  
 本当は失敗させないといけないだろうと。  
 グーグルでは早く失敗させろという言葉があ  
 ると聞きます。しかし、そのとき大事なの  
 はきちんと失敗したことを褒めると、そ  
 ういうインセンティブをつけるということ。

### これからの大学入試に必要なもの

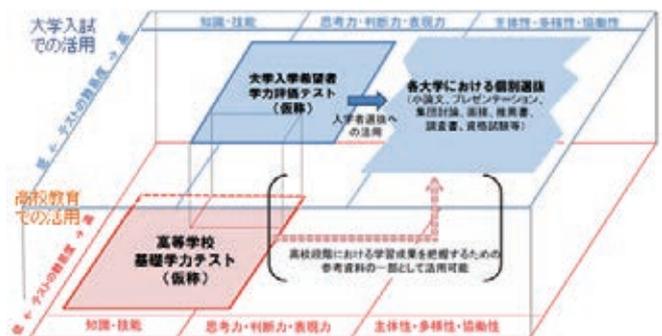
これらを踏まえて、これからの大学入試に  
 必要なものとして、受験生に求める力が例  
 えばこれだとしたら、これらをきちんと評価  
 できる試験でやらないといけない。今まで  
 だと、例えばこれに合った入試、これに合  
 った入試、これに合った入試とって、入試  
 を多様化するけれども、そうではないでしょ  
 うと。全ての力がやっぱり必要ですよとい  
 うラインを示しながら、生徒さんの持つ  
 てる多様性に合わせた多様な入試ができる  
 ようなその試験、あるいはその組み合わせ  
 が必要だ。そのとき、特に面接とか、集  
 団面接、プレゼンテーションの場合には  
 それを評価する人の能力、改善するとい  
 うのがすごく大事になってくるだろう。こ  
 れ、先ほどの小林さんの図の立体版です  
 けれども、我々このところを考えていか  
 ないといけないってということになります  
 が、私は先ほど言ったような新たな入試の  
 方法を取り入れながら、そこに評価の方  
 法を少し新たに取り入れていただくとあ  
 りがたいなというふうに思っております。  
 御清聴どうもありがとうございました。



これからの大学入試に必要なもの

- 受験生に求める力
  - ・大学で学ぶために必要な知識
  - ・学意欲と学び続ける力
  - ・汎用的な学修能力(ジェネリックスキル)
- を評価できる試験(の組み合わせ)  
 及び評価者/ファンリテーターの能力向上

### 新学力テストの活用イメージ



第7回高大接続システム改革会議資料(27.10.28)より一部改変



## パネリストの意見交換

○司会 コーディネーターの荒瀬先生に司会を交代いたします。これから20分間パネルディスカッションのパネル討論という形で行いたいと思います。荒瀬先生、よろしく願います。

○荒瀬副学長 昨日、論点整理ということで、ここにおられます4人の先生方とパネルディスカッションではどういうふうにするかということでの話し合いを持ちました。それで、3点ほど討議をしようかということでお話をしておりました。

1つは、生涯にわたる主体的な学びを実現するために、生徒・学生の学ぶ意欲をどのように育むかということでございます。この点につきましても、小林さんから今日御発表になった能動的な生徒・学生をいかに主体的、能動的な生徒・学生に変えていくかという、そういう御指摘のあったところに合致するんだろうと思います。このあたりのことにつきまして、3名の先生方に御発言いただければと思っておりますし、小林さんから助言をいただければと思っております。

まず、泉先生から地域課題研究を学校の中に取り入れをしておられるということで、ここの中に実施前と実施後とでの意識の違いが出てきておるわけですが、このあたりのところが学生・生徒さんの学びとどういう関係を持てるかということがもしわかりましたら教えていただくとありがたいということと、今後こういう形のを継続的に進めながら、生徒の学ぶ意欲を持続的に持たせることについて、どのようなお考えをお持ちかということにつきまして、御発言いただければと思いますが。

○泉校長 お手元にお配りしてる資料の22ページに、実施前、実施後の意識の変化の表がございます。これも一度ご覧いただきたいと思いますが、この中で真ん中の2つのところ、地域課題研究をする中で話し合ったり考えたりするっていうシーンが多々出てま

います。それから、話し合った結果を発表するという機会も設けておりますが、こういうところには子供たち敏感に反応してくれてまして、そういった形態の学習が好きである生徒が増える傾向がございます。その生徒たちの様子を見てまして、教員が気づくことなんですけれども、日常の授業の中ではなかなかそういうことができておらずその必要性に気づく。いわゆるアクティブラーニング化した授業の意味を腑に落ちた形で理解するようになるということで、子供たちの変化が日常の授業を変えていくという意味で、こういう取り組みは継続することに意義があると思えます。それから、去年の1年生に、これ来年もこういうことやってみたいんだけど、どう思うっていう問いかけをしたところ、やめたほうがいいという生徒は1割、やりましょうという生徒は9割でした。ですから、子供たちには非常にインパクトのある授業であったと受けとめております。

それで、これが実際に学ぶ力、いわゆるテストの点が上がったかとかそういうところにつながったかどうかはわかりませんが、少しずつ生徒が元気になってきてるなっていう感じがします。自分たちで自主的に取り組める場が設定されてるわけですから、がんじがらめのこれやれあれやれっていうところから解放されて、少し自由度の高い中で動けるんだなという意識を持ってきてますので、非常に大ざっぱな言い方ですけども、生徒が元気になってきてる感じがします。

実はスライドでお示した今年の研究テーマは49あって、それぞれがさまざまな課題に取り組んでいるわけなんですけども、「本気でそれ考えてるの？」と問いかけたときに、「いや、何か友達がやるって言ったから、あんまり本気じゃないけども、そのグループでやりました。」という生徒もおります。それで、「いや、そうは言ってもいっぱいある課題の中から、それにひっかかったのは、あなたの中に何かあるんでしょう。」ということ投げかけまして、「プレゼンテーションし

たときの原稿をスマホにダウンロードしなさい。」というふうに言ってます。時々それを見返しながら、新たに気づいたことをそこに書き込んだりしていけど、この課題についてはあなたにしみ込んだものということで、時々見直しなさいということをやっています。そういった中から、また新しい気づきが生じたりするんじゃないかなと思ってまして、これが本気の学びにつながるかどうかは、結局、本気で取り組める課題に出会えたかどうかというところにかかってまして、真正な課題とかオーセンティックな課題と私言ってますけども、そういうものいかに出会わせるかということが重要だと思ってまして、そこに取り組みの難しさもあるというふうに思っております。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。例えば、高大接続というふうな観点で見たときに、大学から何かこういうところで一緒にやったらいいなというところがございましたら、御発言いただくとありがたいと思っております。

**○泉校長** これはもう松崎先生のお話の中にあつたスタートアップセミナー、これを大学生と高校生と一緒にやるという形がいいんじゃないでしょうか。大学生があっちこっち行ってフィールドをやりますと、何か面倒くさいやつが来たなっていう感じなんですよ。それが高校1年生が来ますと、いいよ、いいよ、何でも教えてあげるからと、障壁が低くなりますから、そういうところで高校生を活用していただいて、1次情報をどんどん取り入れて、それを大学生のお兄さん、お姉さんたちが分析してあげるからみたいな形でやる



という形が生まれるんじゃないでしょうか、これ一つ考えられる取り組みだと思います。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

立上先生のところはSSHでかなり学生意欲を高めていくことをしておられるんですけども、やっぱり先ほど松崎先生からございましたけど、卒業論文を通して化ける学生が出てくるというお話でございましたけども、先生のところもSSHの導入以前にもあったのかもしれないけど、専門的な研究を通じる中での学生の意識の高まりは、この導入によって非常に高まりが出てきたとお考えになってるのか、もともと西条農業高校にはそのポテンシャルがあつて、これ入れることによって一層導入が図られたとお考えになってるのか、そのあたりはいかがでございましょうか。

**○立上校長** お手元へ配付させていただいております資料で、スライドで8ページ、9ページ書いてあるところをちょっとごらんいただきたいと思うんですが、先ほど御紹介させていただきましたように、そのSSHの取り組みでかなり体系的な取り組みを組織しています。加えて、9ページへ書いておりますように、先ほども申し上げましたが、自分の興味・関心に基づいて学科を選択して、研究テーマを設定して研究に打ち込み、研究内容をプレゼンする、あるいはそれを英語でプレゼンし、さらに研究を深めるために、大学を選んで進学すると。このような構図の中に生徒があつて、その方向をずっととっていくということがはっきりと明確化してきたと思っています。さっき申し上げたように、いろんな面で本校は恵まれた条件にありますので、従

来からの実績や、あるいはいろんな大学等との間の関係をベースにしなが、今のような形をしっかりと確立してきておりますので、それを今後も続けていくことを通して、さらに一層、生徒のモチベーションでありますとか、将来に対しての動機づけを進めていくことができるのではないかと考えております。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

これは今日の資料の中にSSH研究開発の効果とで、進路のところに影響が出てきて、年度によって違いが、例えば農学系はずっと増えてきてるんですが、工学系は減ってきてる、それから、健康栄養、保健衛生は増えてきてるんですが、文系が減ってきてるようにもとれるんですが、このあたりについてはどのような解析というか、お考えをお持ちでございましょうか。

**○立上校長** 先ほど申し上げましたように、学科特性に非常に合った形での進路を選択をするようになっていってる。学科特性に合った形での研究テーマの設定を行っている。そのことが農学の増加、工学の減少で、健康栄養、保健衛生の増加、文系の減少ということになっているように思います。理学について全く増えていない、少ない状態であるというのは、やはり応用部分に対しての興味・関心が多いということと、専門教育として行っている中身自体が応用科学的な側面が強いことからきてると思いますし、非常に生徒の学科特性に応じた進路選択という意味においてはいい方向で効果が出ていると理解しています。

**○荒瀬副学長** そうですか。

泉先生、先ほど立上先生の場合はそういう学科構成とかそういう問題があると、それが影響してる部分があるんだろうということなんですが、普通高校の場合というのはどうなんでしょう。こういう地域課題の学びということとか、そういうものを入れながら学生の意欲を高めていく中での進路選択と見たときに、何か変化はあるんでしょうか。

**○泉校長** 取り組み始めた学年が今2年生で

すので、この後どういう姿になっていくかはわかりませんが、地域課題に取り組んでいるわけですし、その地域課題をテーマにした学問を立ち上げておられるような島根大学を中心とする全国の大学を紹介して、そういうところでやってみないかという声かけはできますし、そういうことに反応する生徒は増えてきてるんじゃないかと思えます。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

それでは、松崎先生、大学としては、今、今日の午前中の協議会（中国5県の高校の先生方、教育委員会の方々、島根大学教職員で構成する会議）で、島根大学の今後の入試をどういうふうにするかという議論をさせていただいた中に、高校側からの御意見の中に、学力の3要素が高校の中では非常に強く言われておりますけれども、大学の中でもやっぱり共有すべきものではないかという御発言があって、今後、大学としてもその部分は考えていく必要があると思っておるんですけど、松崎先生、大学としては今、受動的な生徒・学生をいかに主体的、能動的な生徒・学生に変えていくかという観点で考えたときに、どういう取り組みが今後重要になるとお考えでございましょうかね。

**○松崎センター長** 私の発表の中で、大学が求めているものを3つ上げたんですが、分け方はちょっと違うんですけども、学力の3要素の中身をちょっと組み合わせを変えただけのことで、恐らくそれは皆さん同じようにそういう力が必要だと言われてる部分だと思います。特に、学ぶ意欲とそれを学び続ける力が欲しいという話をしましたが、せっかく高校でそういう力がついた生徒さんを送ってこられても、大学入ってすぐに1年生の授業はこれかっていうのでは、その努力が無駄になってしまいますね。これはすぐにはできることじゃないかもしれないですけど、1年生に入ってから、まず専門のおもしろみっていうのに触れてもらうのがいいんだろうな。我々の時代はどうも教養で基礎を学んで、2年生か3年生、3年生ぐらいからで

すかね、その上に専門を積むんだという意識がすごく強いと思いますけれども、先ほどのボルダリングのような話で、受験生は学科やコースを選んで入ってくるわけですから、やりたいことがあって入ってくる方が多いだろうという意味では、最初にその専門のおもしろみみたいなのに触れさせて、そのためにあなたができない部分、つけなきゃいけない部分ありますねっていうことで、戻すという手もあると思うんですね。ただ、実際問題とすると、例えば基礎教育科目の英語なんかは必ずやらなきゃいけない必修科目で、それを学年をどうするかっていう問題あるかもしれないんで、それを後にすることはできるかもしれないですけども、むしろ教養科目といわれるリベラルアーツは、私は専門をある程度やった上で積むほうが本当の意味合いが出てくるだろうと。そういうふうに変えるのは簡単ではないかもしれないんですけど、一つのやり方だろうと。学び続ける力っていうのは、多分彼らが興味を持ち続けていたならば、我々が何かそんな引っ張ってどうのこのするものではないので、邪魔をしない、環境を与える。そういうことさえすれば、あとは評価の問題で、きちんと評価してあげることができれば、今からでもできる部分だと思っておりますので、それをぜひ取り入れていただきたいなと、個人的には思っております。

○荒瀬副学長　そういう意味でいいますと、動機づけというか、こちらが意識高揚になるようなものをどういう形で提供するかということが必要だということになるんでしょうかね。

○松崎センター長　はい。

○荒瀬副学長　小林さん何か、コメント等がございましたら。

○小林所長　ある大学さんで、さっき卒業生の調査、学生調査を海外の大学と一緒に比較やったのをこの間学会発表があったんですけども、その大学さんでいくと、同じように専門知識は学生、自分の評価で、1年生、2年

生、3年生、4年生どんどん上がっていくんですね。ただ、課題解決能力だとか自己肯定感とか、論理的思考っていうのは全然上がって行ってなくて、海外の大学はそれも上がっていくんですよ、学年進行で。そのときに、なぜかっていうのを皆さんで考えたときに、やはり最初にこういう力を身につけるっていうのを大学入学時に言っていないんじゃないかと。やりたいことがあるから大学入ってきた、専門大事だよっていうのは言ってるけれども、じゃあ、もっと課題を解決する力とか、課題を発見する力とか、そういったチームワークとかそういうのも身につけようねっていうのを、もしかしたら日本の大学ってあんまり言っていないんじゃないかなと。そのために、聞かれたときに何かそれって育てないんじゃないんかっていうような、自己認識になってないんじゃないかという気がします。今ここでお話しされる皆さん、こういう力を伸ばそうって一生懸命言ってるのが、学校関係者は思ってるかもしれないですけど、実際に受けている高校生とか学生とかがそれが自己認知になっているかどうかというところって結構、私たちは翻訳っていうんですけども、もうちょっとわかりやすい言葉で翻訳してあげて、どの力が身についたかって実感値を持たせてあげるのが非常に重要なと私は思います。

○荒瀬副学長　そういう意味では、教員と学生との接点の持ち方が非常に重要になるということなんでしょうか。ありがとうございます。

もう一つ別のところでお話をお聞きしたいんですが、実は3人の先生方、これまでそれぞれの成果を御発表になってるわけですけども、恐らくその中に相当な苦労が入っている。その部分は余りしゃべられなかったんですが、今後、大学改革、入試改革も含めて、議論になってないのは、そこに所属する教職員がどういう意識でこの問題に取り組むかということが非常に大きな要因に、僕はなってるんじゃないかなと感じてるんですね。

それで、泉先生はこういう地域課題あるいは学生の海外研修等を取り入れて、学生の学びを高めるということに取り組んでこられたわけですが、先生の取り組みから参考にされて、今後、大学の入試改革あるいは大学の教育、高校の教育というのを教員の意識でどういうふうに変えていくのがいいか、場合によってはそれをどういうふうにすればいいかというあたりの参考になるお話が聞ければありがたいなと思ってるんですが、ちょっと難しい御質問をして申しわけないんですが。

**○泉校長** 教員の意識改革というところは、大変重要な問題で解決できてない問題です。先般の、御紹介したしまね教育フェアの中でのパネルディスカッションの中で、司会者が、いや、そうやって何かうまそうに言ってるけど、本当は何か苦労してんじゃないのみたいな質問したんですよ。悩みがあるんじゃないのとかって、ぶっちゃけ言っちゃったらとかなんか聞いたんですよ。そしたら、高校生が、いや、一生懸命やってるんだけど、それを評価してくれる先生とあんまり評価してくれない、スルーしてしまう先生とかいらっちゃって、やっぱりきちんと自分たちの取り組みを評価するような教員集団であってほしいなと言っておりました、そのとおりだと思って私、聞いてみたけども。そこは大きな課題だと思います。ただ、生徒たちの様子を見て変わりますから、子供が変わるということが一番説得力のある、教員を変える要素だと思ってますので、ちゃんと見てほしいなと思ってます。

**○荒瀬副学長** 教員側がきちんと評価して見るという、そういう観点が必要だという。

**○泉校長** はい。もう一つ言いますと、うまくいかなかったときですね、ほら、見ろって言うんですよ。そんなことするから、うまくいかないじゃん。やっぱりもとに戻したほうがいいんじゃないとか言うんですよ。じゃなくて、うまくいかなかったらどうすればうまくいくかなっていう方向で物を考えるような教員集団だといいなあとと思います。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

立上先生、どうですか、SSHの導入とか、そういうことで最初の取り組みのところを踏まえていただきますと、今後の大学の入試改革、教育改革等におきまして、どういうふうに教員というのは変わるのか、そういう手だてなり、方法があるかということも含めて御意見いただくとありがたいです。

**○立上校長** 私自身の考えといたしますか、経験的に感じてることでありましてけれども、高等学校をどちらの方向に向けていくのかということをしつかりと決めていくことが一番じゃないかなと思います。農業高校であります。スーパーサイエンスハイスクールを導入するということはある面で非常に大きな軌道の変更を進めることになります。私自身いろんな教員の声も聞いてみましたし、こちらが個別に説得もしましたし、そういう個別に対応していくという側面も重要でありますけれども、何より校長がどちらの方向へ学校を進めていくのかということをはっきりと決めて、それを教員に説明して、理解させて納得させていくことが一番ではないかなと思っています。加えて、職員に成功体験をさせるということ、成功体験をさせて褒めるということ、そういうものを加えながら、学校全体を一定の方向にはっきりと方向づけていくと、教職員の意識っていうのは変わってくるんじゃないかなと私は思っています。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

方向づけということについて、きちんとしたものが必要であるし、今、大学としては学長のガバナンスということも言われているわけですが、高校等においてもそういう部分っていうのがやっぱり必要になってくる部分があるんだと理解してよろしいですかね。

**○立上校長** 私、非常に重要だと思いますし、今の学校というのが非常に校長の力が以前に比べれば随分強くなっていますので、そういう意味で校長がどのように学校づくりを進めていくのかということが、一番本質的な意味合いを持つんではないかなと思っています。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

松崎先生どうですか、大学側としては。これは学長にお聞きしたほうがいいかもしれないけど、松崎先生。

○松崎センター長 私から答えるのは、なかなかおこがましいところがあるんですけども、私の経験で言いますと、おもしろがったら学生はどんどん行く、そういうタイミングをうまくこちらから提供してやれるといいんだろうなと。例えば、今の地域未来戦略センターの一面にちょっとスペースがあって、学生さんに3Dプリンターを貸与してる。彼らが勝手にいろいろ情報を集めてきて物づくりをするどころか、今度、外部の人を呼んできてセミナーやっていいですかと。積極的に動いて、もう人づくりもしてしまうところもあります。ですから、できることできないこと、境界はあると思うんですけど、できるだけそういうのを実現させてあげると、もう勝手に彼らの中でそういうコミュニティーができたり、そのノウハウが蓄積したりっていうふうにして、先生方、実はあんまり手をかけずに育つ環境ができるんじゃないのかなと思ってます。

あと卒論までいくと、またいろいろあるんでしょうけど、最近大学もちょっと予算がなくて、学生さんがやりたいっていう実験をやらせてあげることが必ずしも簡単ではないんですが、私が学生るときには予定の指導教員のところに行って、当時は教官ですかね、これがやりたいんですけどと無謀なこと言ったらオーケーしていただいて、非常に喜んでやらせていただいたっていうことがあります。ですから、彼らの中でちょっとしたことで認めてもらった、責任を自分に負わせてやらせてもらえたという信頼感とか、そういうちょっとしたきっかけで実は結構変わるんじゃないかなというところを、先生方もう少し大事にされたらいいんじゃないかなと思ってます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

その辺のところは先ほどスライドで見せていただきました満足度の問題のところで、教員

とのコミュニケーションというところですね。

○松崎センター長 はい。

○荒瀬副学長 その部分は非常に学生としては評価が高いということを考えると、そういう部分に教員は今後力を入れて、学生との接点をできるだけ持ちながらやっていくことが必要なんじゃないかなと思いますね。

○松崎センター長 すみません。もう一つよろしいですか。

○荒瀬副学長 はい。

○松崎センター長 忘れておりました。午前の協議会のところでも出た意見ですけども、先ほどの話の繰り返しになりますけど、1年生のときに気持ちをちゃんと持っていきけるっていうんですかね、おもしろい、この大学に入ってよかったって思えるような授業に出会わせてくださいって話ありましたので、ぜひ、その1年生を担当される先生方、頑張っていたいただければと思ってます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

そういう意味でいいますと、きょう午前中もありましたけども、結局、島根大学に入るとどういう力が身について、どういうことが将来社会に出てもやっつけられる力かという等々、その辺の御意見を高校サイド、教育委員会サイドからもいただきましたので、その中に島根大学としてはという、先ほど大学というのがなかったらどこのかわからないという、問題があるということで、今後の入試改革も教育も含めて、島根大学という特色が見える形のを表に出していくという、そういう中で教員はどういう意識を持って学生とつき合っていくのかというところが今後非常に強く求められるところかなと思いましたが、

小林さんから何かコメント等ございましたら。

○小林所長 まさにそのとおりで、これから10年間で大学に入る18歳人口って10万人減るんですね。大学進学率を50%とするのと、5万人が受験生からいなくなると。そうすると、単純計算で500人規模の大学が

100校なくなってもおかしくないぐらいのマーケットにインパクトがある状況です。そうなってくると、もう成熟、全体が成長するってことはなくなってくるので、やはり個性をどう出していくか、今おっしゃったようなところが非常に重要になってきます。ですので、さっき中国山地っていうふうにおっしゃってましたけど、ちょっと言い方が中国山地じゃなくて申しわけないんですけど、富士山型から八ヶ岳型っていうふうによく言われてるんですけども、ピラミッド的な東大を頂点とした偏差値の序列化ではなくて、先ほどのアドミッション・ポリシーの作り方の中のポイントの1つに、強みや個性や役割がありますよねと、各大学、それがあって、

それをきちんと立てていって、八ヶ岳的な幾つも頂上があるような状況をつくっていきましよう。なので、よく申し上げてるのが、国がどうするかって、質問を受けるんですけども、「国が」が主語じゃなくて、「うちの大学が」とか、「うちの高校が」っていうふうに主語に変えて、先生方が議論できるようになるといいのかなというふうに思ってます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

それでは、会場の皆様方から今後御質問等あろうかと思しますので、その時間をこれからつくりたいと思います。パネリストの討議につきましてはここで締めさせていただきます。ありがとうございました。

## 総合討論

**○荒瀬副学長** それでは総合討論ということで、これからは会場の皆様から御質問をお受けしたいと思います。質問に当たってはお名前と所属名、それから、もし決めておられる方、お答えいただきたいパネリスト、あるいは助言者を決めておられれば、どなたにということもあわせて言っていただけるとありがたいと思います。

それでは、皆様方から御質問を受けたいと思います。どなたかございましたら、お願いをいたします。

はい、どうぞ。

**○本田講師** 島根大学キャリアセンターの本田と申します。どうもきょうのお話ありがとうございました。いろいろとお話伺って、大学とか高校とか教職員を採用する際に、恐らくそういう求める人材像を、ちゃんと育てられて評価できるのかみたいなどころを見て、採用とか教育とかをしていかなきゃいけないんだろうなということをしごく感じた次第です。というのが、今、感想です。

2つお伺いしたいことがございます。どなたにというのはないんですけども、受ける方にです。1つは、ストレートに上がってステップアップしていく必要がありますでしょうかということ。つまり、高校から大学、大学から就職もそうですけども、あとは在学中でも転学部とか転学科とか、留学、休学ってさまざまなキャリアパスがあると思うんですけども、そこは恐らく今、日本ではあんまりできていないところだと思っています。恐らく新卒一括採用であったりという、出口のところでかなりバリアがあるので、しづらく出ると思うんですけども、その部分についてどのようにお考えかということをお伺いの1つです。

2つ目は、最近非常にアクティブラーニングということで注目度が上がっていますが、恐らく今実際にやられてるアクティブラーニングの科目は本来の定義と少しずれて、非常

に活動がアクティブなものです。つまりコミュニケーション力がかなり問われるような、ディベートグループディスカッションが多くなってるような気がしております。これが突き進んでしまうと、恐らくアクティブにそういうラーニングすることが、意欲としてできない学生・生徒さん、もしくは特性、性格としてしづらい人たちっていうのがあると思うんですけども、そこについての配慮をどの程度お考えになられてるのかということについて、お考えをお聞かせいただけると助かります。

**○小林所長** 最初のほうの御質問で、多分これから、よく私もモザイク型社会って言って、今までは成功のロールモデルっていうのがあって、偏差値の高い大学に行って、大企業に入るのが日本のロールモデルで、一生同じ会社で勤め上げるのがロールモデルだったんですが、それがもう社会的に環境が変わってきてますので、多分そういった流動性って非常に高まってくると思います。新卒一括採用は多分効率性の問題で、それやらなかったらもっと多分長期化して大変なことになると思いますんで、日本の中で残っていくとは思いますが、もう途中で採用が非常に盛んになってますので、例えば、たまたま就職する時期が厳しかった子たちは今30代ぐらいで、中小企業から大企業にステップアップしたりとか、またそこからラインを変えたりとか、そういった横の選択をいろいろされています。あとは飛び級とか編入とか、もっと出てきていいと思います。日本は過度な年齢主義で、それこそ到達主義じゃなくて年齢主義なので、学年で進行していくと。なので、飛び級でいくと、飛び級した子がいじめられるとか、本末転倒な状況になっていると。企業のほうも、ちゃんと自分で語れば、1浪、2浪、あるいは留年してもちゃんと採用するようになってますので、ここら辺は自分でどうキャリアをデザインするかっていう時代になってくると思います。今までは一括、みんな一緒っていうんじゃないくて、多分幸せの形がどんどん変わ

ってくると思いますんで、そういった自分の幸せをどうつかんでいくかというようなキャリアの教育になってくるんじゃないかなと思います。よろしいでしょうか。

○**本田講師** ありがとうございます。ぜひ、文科省とかのほうでやられてるので、そちらの方に今話をいろいろと伝えていただけると大変助かります。

○**小林所長** いろいろ頑張ってるんですけど、すみません、まだまだ力足りなくて。

○**松崎センター長** 後段のほうですね。実はすごく大きな問題だと思ってます。実際、大学でも程度の軽い適応障害の方、学習障害の方って、先生方もどういうふうに対応していかかわからない。一方で、入試でそういう人をはじけばいいんじゃないかって議論もあるかもしれないけど、それは多分間違いだろうなって私は思ってます。ですから、いろんなタイプの人がいることが多分全体の学習のためにすごくいい。そうすると、先ほど来、ジェネリックスキルがっていう話をしましたが、あれが高い人だけをとってたらっていうと、恐らくはじかれるてしまう人の中にすごく才能のある方がいる。だから、入試は多分多様にしないといけないし、その後の対応も多様にしていけないといけない。それが、1つの大学でそういう人だけを集めるっていうこともあるでしょう。1つの大学の中に多様なこともあるでしょう。どちらがいいのかってなかなか言えないですけども、先ほどのほかの学生に対する影響を考えると、恐らく1つの大学の中に多様な人を入れるような入試があって、そういう学生さんを育てるプログラムをこれからもっときちんと出していけないといけないと、個人的には思ってます。ただ、実際にはなかなか大変なんだろうなという意味では、そこら辺は本当は国の施策として、そういうところをきちんとお金を出していくことをしていけないと、結構難しいのかなという気がしますけど。

○**本田講師** ありがとうございます。

○**荒瀬副学長** ありがとうございます。

泉先生。

○**泉校長** ALの話ですけれども、ぺらぺらぺらぺら上手にしゃべる、活動する生徒が評価が高くなるんじゃないかっていう恐れは、私も感じています。小林さんのトークと私のぼそぼそしたトークを比べれば、圧倒的な言語能力の差があって、私はリクルートには入れないと思うわけですけども、ALの1つの狙いは、特にうちの学校なんかそうなんですけど、上手にわかったふりをするんですよ。それを本当にわからせる。ああ、なるほどそういうことだねと、腑に落ちたわかりっていうか、そういうところまで持っていくための手段が一つ、ALの目標かなと思ってまして、最後はやっぱり活動させた後、個に落として、本当にわかった、できるようになったというところを評価していくことが必要だなと思ってます。わあわあわあわあやりとりしてるところだけじゃなくて、やはり最後は個に落とすということが必要じゃないかなと思ってます。

○**本田講師** ありがとうございます。

○**荒瀬副学長** ありがとうございます。

立上先生はよろしいですか。

○**立上校長** 広島県においてもそういうアクティブラーニングの実践っていいですか、取り組みを進めていこうとしてるわけでありましてけれども、いろんな意味でこれからという側面がありますので、だから、いろいろ学校がこう進めていく中でいろんな課題も出てくると思いますし、今、御指摘のあったような問題もこれから出てくるだろうと思うんですが、それを各学校がどのような形で具体的に考慮しながら進めていくかは、高等学校の場合についてはこれからじゃないかなと思ってます。

○**荒瀬副学長** 本田先生、よろしいですか。

○**本田講師** はい。

○**荒瀬副学長** ありがとうございます。

そのほか、御質問。

熊倉先生、どうぞ。

○**熊倉教授** 島根大学医学部の熊倉でございます。

小林先生に1点と、あと泉先生に1点お伺いしたいんですけども、小林先生には高等学校基礎学力テスト、これについてちょっと伺いしたいんですけども、学力の3要素であります知識と技能ですね、このテストでC B Tを用いて評価するということですが、この技能ということがどのようにこのC B Tで評価できるのか。ちょっとテクニカルなことですけどもその点お聞きしたいと思うんですが。というのは、医学部のほうでも、大学、医学生ですけども、教養試験実施機構ではC B Tで基本的な知識をチェックする。それから、技能に関しては、これスキルですね、診察の仕方とか血圧計のはかり方とか、それに関してはこういった記述ではチェックできないということで、オスキーといって、Objective Structured Clinical Examinationですね、実技を模擬換算を用いてしてもらってることを評価するというふうなことをしてございます。できること、スキルですね、技能を評価する、できるかどうかはやっぱり実際、ちょっと筆記試験とかではできないと思いますが、その点について、高校のこの試験の中では技能、恐らく定義がどういう定義かっていうこともあると思いますが、どのようにこの技能を評価しようとしているのか、この点についてちょっと御意見なり教えていただきたいと思えます。

○小林所長 これはですね、私が決めてるわけではないですし、ワーキングというところで今議論がされてまして、その中身が出てこないところが一番、私たちとしてもストレスなところですが、技能については議論がされていない。システム改革会議のほうでは技能ということについての議論はされてないです。つまり、知識をはかるということで、英、数、国という基礎科目についてC B Tではかかっていきたいと思います。あるいは、英語については4技能をはかっていきたいと思いますということは議論されているんですけども、そのほかの技術を、技能をどうはかるかは今の中では議論がされていないという認識です。

○熊倉教授 単純な話でいうと、例えばクロールが泳げるかどうか。

○小林所長 はい。

○熊倉教授 これは技能の1つだと思いますけども、これはペーパーでチェックしても、例えば右手を上げて、水に沈めて、何か口をあけて息をするとか。

○小林所長 はい。

○熊倉教授 これを書いたり、印をつけてチェックしたりとかできるんですけど、実際泳がしたら溺れちゃうとか、そういうこともあるかと思えますので、その点ですね、定義なりをしっかりと、どういうふうな評価ができるのかっていうことが必要なのかなとちょっと思ったんで……。

○小林所長 そうですね。あくまでも高校1年生のコアのコアの一番基礎の学力をはかるテストになりますので、そういった難易度の高い問題をそこで出すという想定はしていません。

○熊倉教授 はい。ありがとうございます。

それから、泉先生についてちょっとお聞きしたい点は、島根大学でも先ほどから話がございまして地域貢献人材育成入試、これを始めております。地域に貢献する人材を育成するっていうことで、地域あるいは高校から、医学部に関しては平成18年度からやってるんですけども、地域志向の学生を推薦していただいて、大学で受け入れて養成していくということでございます。医学部では年に1回、あるいは2回ぐらいですかね、高校から担当の先生に来ていただいて、送り込んだ学生がどうなっているのか、ちょっと意見交換をする場を持っております。きょうのディスカッションの目玉の1つでもあります、高大接続ですね、これをどうしていくか、どう改革していくかっていうことが1つ議論なっていると思いますが、その中でもう少し高校の先生が大学のほうに来て、高校で育成した人、自信を持って推薦してくれた人がどのように育っていくのか、本当に地域に対する意欲とか熱意、あるいは使命感をずっと持ち続けてや

っているのか。あるいは、それを向上させて  
いただけるように高校のほうからもプッシュ  
してもらおうとか、そういったことが組み  
が可能なかどうか、その点についてお聞か  
せいただければと思います。

**○泉校長** 大学に入って、大学教育の中で力  
をつけてきた学生の姿っていうのは、我々も  
非常に見たい姿でありまして、生徒にとって  
はいいロールモデルになると思ってます。先  
般、校長協会との情報交換の場があったん  
ですけど、そこで島根県内出身の学生さん  
たちがプレゼンテーションする姿を見て  
まして、ああ、なるほどな、ちゃんと育  
ってるなと感じました。やっぱりそうい  
うところを教員も知らないといけないし、  
生徒たちが、ああ、あの先輩、島大行  
ってこんなに変わってるみたいなどころ  
を示す場はぜひつくりたいなという思  
いでおります。特に地域医療に活躍し  
ておられるようなお医者さんですね、  
ぜひ学校に来てお話しただけならいい  
なと思います。こちらからお願いします。

**○熊倉教授** どうもありがとうございました。

**○荒瀬副学長** 今の熊倉先生の後段の部分  
につきましては、先生御存じだと思います  
けど、島根大学では教育・入試懇談会とい  
うことで、高校の先生方と大学の教員と  
が一堂に会していろんな意見交換をす  
るといふときに、その中で先ほど泉先  
生も言われましたけども、県内の出身  
者の状況を学生たちにプレゼンをして  
もらって、どういうふうになってきて  
るかを見ていただく中で、非常にいい  
企画だというふうに言われておりま  
して、今後、この企画については進  
めていくことにしたいと思っております  
ので、医学部からもぜひ参加をして  
いただけると、その部分っていうのは  
ある意味対応できる部分があると思  
っておりますので、ぜひまたひとつ  
よろしく願いいたします。

**○熊倉教授** 了解いたしました。

**○荒瀬副学長** それで、先ほど後ろの方、  
どうぞ。

**○吉岡氏（学生）** 失礼します。島根大学教

育学部の吉岡です。

西条農林高校の取り組みについて、ちょ  
っと質問したいなと思ってるんです  
けど、僕の高校は、今、校長先生も  
おられたり、当時の先生もおられ  
る中で言うのも何なんですけど、  
松江北高校で典型的なチョーク  
アンドノート型の授業をしてた  
ので……。

本当にこの農林高校の授業っていうのは、  
僕が体験してきた高校の授業と全然違  
って本当に素晴らしいなと思  
いました。

その中で質問なんですけど、ちょっと大  
学入試改革とは直接関係ないか  
もしれないんですけど、これだけ  
特色のある授業を展開していると、  
高校生なので高校生活を送  
ってる中で農業をメインで高  
校のときは入ったかもしれない  
けど、いろんな人と会う中で  
農業という面とちょっと違  
う方向に自分進みたいな  
みたいな考えを持つ生徒さん  
って中にはおられると思  
うんですね。そういう生徒  
さんも含めてやっぱり主  
体的な学びをしていこう  
と思ったら、生徒さん  
に対するサポートって  
いうのがやっぱり必要  
になってくると思うん  
ですけど、この西条農  
業高校さんではそう  
いった生徒さんがもし  
おられた場合、一体ど  
ういうサポートをして  
るのかをちょっと疑  
問に思ったので、もし  
何か事例とか、こう  
いうことしてるって  
いうのがあれば教え  
ていただきたいな  
と思います。

**○立上校長** 御質問ありがとうございました。  
本校の場合、7学科ありまして、入  
学段階でかなりはっきりと専門性  
が出てきますから、1年生の  
スタートのときからその専門  
教育っていうものがずう  
っと続いていくことにな  
ります。ただ、その過程  
の中で、担任はもちろん  
なんですけれども、学  
科の教員がかなり時間  
をかけて生徒との間で、  
例えば朝早く来て自  
習したり、放課後も自  
習したり実験したり  
という中で、かなり  
の時間をかけて生徒  
との間の付き合いが  
続きますので、いろ  
んな面で一人一人  
の生徒に対して  
かなりきめ細かな  
指導を進めて  
いることもあ  
って、余り専門  
性から外れて  
いくということ  
に対して、多く  
の生徒が

そっちの方向へ進んでいくというわけではありません。ただ、例えばアメリカへ2回行ったような生徒が時々いて、そういう生徒は英語を勉強したいっていうことを言い出して、大学の英語のほうへ進んでいくような生徒もいますし、それはそれとしてしっかり学校としてはバックアップをして指導もしていますので、基本的には専門教育っていうことでかなり時間をかけて丁寧に指導していくということと、もしそこから違う方向で進んでいきたいという生徒が出てきたら、それに対しても丁寧に対応はしておるといふことであります。

○荒瀬副学長 よろしいですか。

○吉岡氏 はい。ありがとうございます。

○荒瀬副学長 そのほかございませんですか。  
はい、どうぞ。

○原田講師 島根大学の原田でございます。  
貴重なお話しありがとうございます。

泉先生にお聞きしたいことが1点ございまして、一番最後のスライドで配点を具体的に書いていただきまして、配点が逆になつたらという、この数字を見せていただいたときはっと気づいたんですが、果たして高校の評価がそうなるかっていうと、恐らくそうならないのではないかと考えております。恐らく、大学と高校の話のやりとりをすると、必ず大学に圧力が来たら、いや、それは高校までやっておる、いや、高校でやってないから大学でやってよってという言い合いがあると思うんですけど、その中で、じゃあ果たして今後高校の評価、もっと言えば高校入試とか、中等学校入試段階で、このような評価の枠組みを島根県で実施していくことが果たして可能であると考えているのか、またそうしていくべきと考えているのか、まず1つ目教えていただきたいと思ひます。

2つ目ですが、これはどなたにかは漠然としておりますが、高校の先生にお答えいただきたいところですが、いわゆる3つの学力は確実に提示されています。その中で、今回の発表はどちらかというと、後半の活用であつ

たり、課題発見であつたりとかつていった事項が中心であつて、それをメインに話してくれてことだつたと思うんですけど、やはり1の知識、技能、それを担保した上で、2と3が発展するっていうのは文科省も明確に提示してる部分だと思ひます。一時期、大学入学者の学力不足は明確に問題になりました。果たしてそれが解決されたかつていうと、解決されないままアクティブラーニングとかつていう方向に話が、焦点が移っただけで、学力問題の根本的な問題は実は解決してないんじゃないかと。そこを高校の側はどういうふうな考え方で今思つておられるのか、教えていただきたいと思ひます。あわせて、高大接続システム改革の中で、こういった議論が行われてるのかかつていうところを少し教えていただきたいと思ひます。

3つ目でございますが、こちらは高校の感覚を教えていただきたいんですけど、一時期、階層問題と学力が関係してるっていう議論があつたと思ひます。今回お示しいただいた問題っていうのは、言つてしまえば非常にお金のかかる勉強だと思ひます。一方で、こんなことやれつて言われてもできない子もきっといるはずだと思ひます。そういった人たちに、高校は今どういった支援をしていくべきか。また、支援ができないとなつた場合に、じゃあ、どういった枠組みでこういった学習を促進していくべきか、そこをどう考えているのかをちょっとお示しいただければと考えております。よろしくお祈ひします。

○荒瀬副学長 どなたに御質問されますか。

○原田講師 まずは泉先生に。

○泉校長 配点のことですか。

○原田講師 はい、そうです。配点について。

○泉校長 これはですね、大学が設定されればいい問題だと私思つてまして、こういう学生が欲しいからこういう配点という形で提示されれば、高校としてはそこにマッチするような学生を受験させるという形になるんじゃないでしょうか。

○原田講師 質問の意図は高校入試段階では、

こういう配点になって、先生からの御意見はどちらかという、配点を逆にしたらいいんじゃないかという御提案があったと思います。

○泉校長 高校入試ですか。

○原田講師 はい。

○泉校長 高校入試は今のところ、全て教科のペーパーテストの点数でやっていますね、一部推薦の形の入試がありますけども。

○原田講師 その枠組みが維持されたまま、大学で突然この配点を逆にするっていうのは、それ教員の側も理解が得られないし、学生もなかなか適応できないんじゃないでしょうかという御質問でございます。

○泉校長 おっしゃるとおり、小中高とつながっていくという上では、高校入試の評価基準も変えていく必要も出てくるんじゃないかと思えます、今後。今はそうはなってないですね。おっしゃるとおりです、はい。

○原田講師 2つ目ですけど、知識や技能を担保する枠組みっていうんでしょうか、これは県単位で、高校までですと実施されてると思えますので、その取り組みについて、泉先生と立上先生にちょっと現状を御説明いただければと考えております。

○泉校長 いわゆる教科の学力っていう点では、松江北校の場合は先ほどありましたように、チョークアンドトークで徹底的にやるといふところがあって、ただ、私の目から見ると、いやそこまでやらんでいいじゃないの。基本的なことを入れ込んで、あとは持ち駒で勝負せみたいところ、その持ち駒で勝負するところもこうやってやるんだよ、ああやってやるんだよって、全部やるといふ実態があるので、そこは少し緩やかに子供たちに任せるような形でやったほうがいいんじゃないのとは訴えてますけど、今はそうはなってないです。おっしゃるように、ペンギンの写真で見せましたけど、歩くためには足腰が必要で、これは基礎学力ですから、これはやはり外せないと思っています。ただ、じゃあ何が基礎学力なのっていうところが、実はあんまり見えてないところもあって、島根

大学としてはこういうことを基礎学力というんだっていうところを入試の問題に込めて、メッセージ性を持った入試をつくられてほしいと出されたらいいんじゃないでしょうか。今現在、そうなってると思えますけど。お答えになってないでしょうか。

○原田講師 ありがとうございます。

○泉校長 ありがとうございます。

○立上校長 配付させていただいてる資料のページ番号で言って23番と24番のところを見ていただきたいと思うんですけども、本日の発表については御指摘のように、知識、技能という側面については、特に前面に出したような形では発表しておりませんが、それが重要であることは言うまでもないことでありまして、しっかりと基礎学力っていうのを身につけさせていかなきゃいけないと。そのための方法として、そこの24ページということで振ってあるような取り組みを行っておりますので、決して軽んじているわけでもないし、しっかりと身につけさせなきゃいけないと考えています。

○原田講師 3つ目の。

○小林所長 そうですか、いやシステム改革会議というか、高大接続特別部会のほうでもやはり基本的な知識、技能はベースだろうということで議論がされています。基礎学力テストをきちんと入れて、何が一番変わってるかという、進学率が変わったんですね。昔は60%しか行ってなかった高校にほぼ100%行くようになりましたと、ここのベースをきちんと基礎学力は上げていきましょう。これが基礎学力テストです。これ、入試にしたらから面倒くさいわけであって、そうではなくてこれは質の保証ですと。大学は、大学も1990年の大学進学率って25%なんですよ、つい最近じゃないですか、わずか20年ぐらいで進学率が倍になっています。ある意味裾野が広がっていると、学力の下方拡大が広がっていると思えますので、これは大学側が受け取るほうとして定義をしてくださいという形になります。もしかしたら島根大

学が出す学力、学力というのが先ほど泉先生がおっしゃったどの学力のことを言ってるのか、いや、うちは本当に教科型を一点刻みでやりますよっていうなら、そういう大学だというふうに外から思われるだけであって、それは大学側がミッションに合わせて設定してくださいという形になります。ただ、国としては全体の底上げをしていくということで、前回の学習指導要領の改訂はゆとりからの脱却で、小・中学校がメインでした。今回は高校を変えていこうということで、高校の中身と評価の仕方を変えていくと。これを大学とつないでいくという形で、全体の底上げと、あとは接続を考えるというベースの考え方になっていると御理解いただければと思います。

○泉校長 3番目の御質問については、私もいわゆる経済的バックグラウンドが、バックボーンがある学校は強くなって、そうでない学校は衰えていくということは危惧しています。例えばSSH、SGHをやっている学校は、SGUに指定されたような大学とつながりやすいと思います。ですから、そこに何ていいですか、二極化とまでは言わないけども、何か格差が生じるんじゃないか。例えば業者が英語のその4技能テストをiPad使ってやったりしてるんですよ。それうちでもやらせてくれないかと、いや、SGH校でしかやらせませんみたいなこと言うんですよ。そうすると、まあそういうところでも明らかに格差が出てきたりしますよね。それを何とかしないといけない、お金を使わないで何とかしないといけないと思う一方で、どっかからお金をとってきてやろうっていうことも必要になってきて、なかなか難しいんですね。おっしゃることは、私もそういうふうに感じてます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

○原田講師 ありがとうございます。

○泉校長 はい。

○荒瀬副学長 それでは、ぼちぼちと思いますが、もうお一方、もしございましたら。

はい、どうぞ。

○川路教授 教育学部の川路と申します。今

日はどうもありがとうございました。

聞かせていただいて、松江北高校やそれから広島の高校の実践を聞いていますと、こういう学生さんたちが大学に入ってくるんだったら大学入試は何のためにするんだろうかと、そういう高校生だったらみんな入ってもらってもいいのにと感じておりました。

大学入試改革というのは全部入れるのが一番いいんじゃないだろうかとという前置きをさせていただいて、逆にうちの学部170人です、170番と171番の違いを、泉先生のこのA、B、C配点をどういうふうなバランスにしても、結局170番と171番はできてしまうので、そのあたりはどう考えればいいのかというのがありました。結局、どこに力を入れても170番と171番はいるということですね。

逆に言いますと、2つあるんですが、1つは、それだと私どもにも大学にもディプロマ・ポリシーというのがあるって、入ってくる学生さんが学力が高いのか、志が高いのかによっていろいろあるんですけども、最終的にうちの学部で学ぶべきことが学び切れなかったら、結局大学を卒業できなかったりとか、留年するっていう社会ができていかないと、結局入ってきたところの問題じゃなくて、出ていくときにディプロマ・ポリシーはあんまり学び切れてなかったけど、とりあえず大卒っていう資格をあげましようかっていう社会がずっと続いていくと、どうしようもないんじゃないだろうか。逆に言うと、大学で退学していったり、留年していく学生さんがふえていくっていうことをどう考えるかということが1つと、あともう一つは主体的な学びをできる子たちが今日紹介されてますけど、できない、先ほどの言うと、前の30%の席に座る子と後ろの70%の追従型の学習、誰かが一生懸命やってるから私もあそこのグループに入ったらできるんじゃないだろうかのでも、学びはできてないとは言えないと思いますので、そういう子たちの学びと、それから、その子たちがどうやったら主体的にな

っていくの、それは大学の仕事なのか、それとも高校側とつなげていくことなのかっていうことについてちょっとお考えがあれば、どなたにというわけではありませんが、お聞かせいただければと思います。

○荒瀬副学長 そのあたり、どなたか。

○泉校長 主体性を育むというところは、高校の仕事でもあるし、大学の仕事でもあると思います。やっぱり点数で刻んでいくと、おっしゃるように、ぎりぎりのところで1点差で落ちたり通ったりっていうところが出てくるのは、選抜をするわけですから、どうしてもそういうことは出てくるのかなというふうに思いますけども、公平性とかそういうところが問題になりますけど、私の感覚としては大学入試が、これ入社試験とは言わんけども、うちの大学に入ってくれたら、大学自体を活性化してくれるような目の前の学生だなというような者を直観的にもう採用すると、入学させるというところ、そこら辺を少し緩やかにやっていく形に、今なってきたあるのかなと思ったりしてます。じゃあ、それ主観が入って選抜するようになるので、公平性はどうやって担保するんだっていうところが出てきますが、しかし、それはそれで僕はいいんじゃないかなっていう気はします。

○荒瀬副学長 よろしいですか。

○松崎センター長 出口のところの話、多分、あと小林さんから話していただいたほうがいいのかと思うんですけども、恐らく今まではやっぱり入口の問題のほうが大事で、出るほうはゆるゆるにしてるところもあるんかもしれない。大分、昔よりはきつくなってる。本来だったらあるところに達してなかったら、それは退学させるなり、途中で移ってもらなりってしないといけない。しかし今、留年させる割合が多かったり、退学が多いと、大学にペナルティー来ますね。文科省は何をさせたいのか、何をしたいのかっていうのがちょっと疑問ではあります。そういう現実がある中でやっていかないといけないのが少しもどかしいんですけど、本来だったら、小林さ

んの話の中にあっただようなナンバリングみたいなもので、自分が修得した単位っていうのはきちんとこの内容についてこの評価であります、それを持っていろんな大学に移れるっていうふうになれば、自分はここじゃないんだっていうことで移っていける、そういう自由度が出てくるんだらうと。ただ、それになるにはものすごい時間かかるんじゃないかな、でも、そうしていかないといけないじゃないかと思っています。

○小林所長 ありがとうございます。

先生のおっしゃるとおりで、本当に、先ほど入学の国から卒業の国って言い方をさせていただきましたけど、やはりアドミッション・ポリシーからつくるってことはあり得なくて、ディプロマ・ポリシーがあって初めてカリキュラム・ポリシーがあって、アドミッション・ポリシーがあるというふうになりますと、そこがちゃんと連続していることが重要で、今の文科省の概算要求でこの高大接続改革で70億円ぐらい出てるんです。その中の30億円は大体この入口、中身、出口を一貫して、卒業までを厳格化していく形の流れに予算申請がされてます。そういったことをちゃんとやるところに予算をつけていこうという、文科省の意図は見えるかなと思います。ただ、これが、じゃあ一、二年でできるかというときとできなくて、10年ぐらいかかってそういった形でできていくのかなと。多分、学位の国際通用性ってこともこれから出てくると思いますし、もうシンガポールなんかは、世界の大学と交流するためには世界ランキング何位までじゃないと交換留学受け入れないみたいなことを言い出ししたりしてますので、それがいいかどうか全然別にして、大学のほうでも質の保証というのをしていくためには、卒業要件の厳格化っていうのは避けられないと思います。そのためにやっているのが文科省がちぐはぐだっていうのであれば、ちょっとそれを言わないといけないですねっていうところだと思っています。

○荒瀬副学長 川路先生。

○川路教授 ありがとうございます。

私自身は主体的な学びができる子はとてもいいんですけど、追従的な学びができる子もいいんじゃないかなというふうに、個人的には思っています。そんな子たち、主体的な学びだけの子がいると、それはそれでまた大変な世の中になるかなという気もしていますので……。そういうバランスのある子供さんたちが大学に入ってきてくれて、いろんな学びができればなというふうに思っているところです。ありがとうございました。

○小林所長 そうですね。先生のおっしゃるとおりで、やはり今2・6・2っていうふうに言われてんですね。大体2割がいろいろやっていて、6割がフォロワーでついていて、2割はどうかなっていうふうに見てる。この比率を上げていきたいというのが多分方向性だと思います。ただ、そうじゃない子たちでも、入ってきた学生はきちんと面倒を見るというようなことが先ほど言った大学のコミットメントになってくると思っていますので、それがきちんと高校にフィードバックいくシステムですね、さっきおっしゃったような、

報告というか、わざわざやらなくても、学生が自分で高校に行ってこんなことやってるんだよっていうような、先生に報告するようなバックトゥースクールっていつてるんですが、そういうような仕組みっていうのもつくられたらいいんじゃないかなと思います。

○荒瀬副学長 川路先生、よろしいですか。

○川路教授 ありがとうございます。

○荒瀬副学長 まだ御質問等あろうかと思えますけど、ここで締めさせていただきたいと思えます。まとめは非常に難しいのでいたしません。解がいろいろあるということにさせていただきたいと思えます。

それでは長時間御出席いただき、御質問いただきましてありがとうございます。いま一度3人の先生方、発表者のパネリストの方、助言いただきました小林様に、もう一度大きな拍手をお願いできればと思います。

どうもありがとうございました。

それでは、これでシンポジウムを閉じさせていただきます。長時間ありがとうございます。

# 付 録

---

- アンケート結果
- シンポジウムポスター

# 平成27年度大学改革シンポジウム 事後アンケート結果

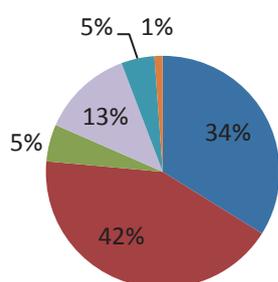
2015/11/6（金）実施

参加者	179
回答者	116
回答率	65%

## 参加の動機

1. シンポジウムの内容に興味があった	59
2. 大学改革のあり方について	74
3. 大学の取組を参考に	9
4. 高校の取組を参考に	22
5. その他	8
未回答	2

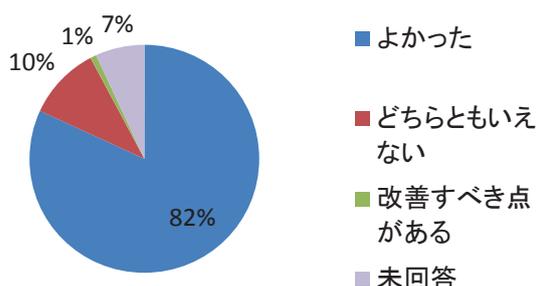
## 参加の動機



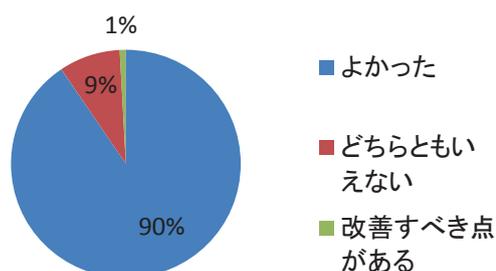
- 1. シンポジウムの内容に興味があった
- 2. 大学改革のあり方について
- 3. 大学の取組を参考に
- 4. 高校の取組を参考に
- 5. その他
- 未回答

	シンポジウム全体	基調講演	パネルディスカッション	総合討論
よかった	95	105	81	64
どちらともいえない	12	10	24	16
改善すべき点がある	1	1	3	3
未回答	8	0	8	33
合計	116	116	116	116

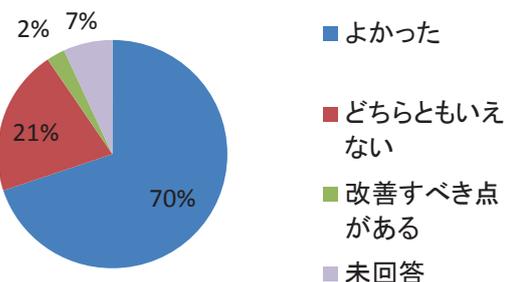
## シンポジウム全体



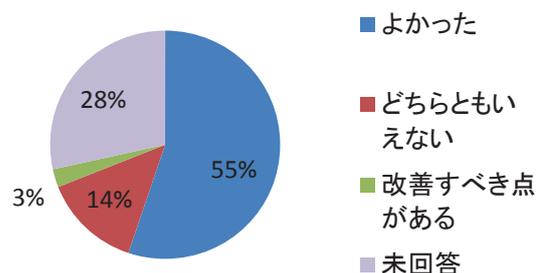
## 基調講演



## パネルディスカッション



## 総合討論



# 「大学入試改革」どう変えるのか

—主体的な学びを実現し、広く社会に貢献できる人材を育てるために—

国内では、生産年齢人口の急減、産業構造や就業構造の転換、地方創生への対応等、新たな時代に向けて大きな社会変動が起こり、国際的にも進展するグローバル化・多極化や情報社会への転換の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための資質・能力を育む教育が、今、急速に重視されています。

「大学入試改革」は大きな社会的関心を集めていますが、その本質は、「入試改革ありき」ではなく、高校教育・大学教育・大学入学者選抜の改革を一体的に進め、人材を育成(人づくり)することにほかなりません。

このたびの島根大学発の大学改革シンポジウムでは、地域や社会の人的・物的資源等をどのように生かして高校教育を実践しているのか、また、大学は、地域社会の豊かな学びのフィールドを生かして高校教育の成果(たまもの)ともいえる学生をどのように育成しているのか、そのために入試をどう変えていくのか等について、意見交換し議論するものです。

ぜひ、ご参加ください。

## 開催日 the date

# 11.6

【FRI】

開場 12:15～  
開演 13:00～16:40

会場 くにびきメッセ 小ホール  
(島根県松江市学園南1丁目2-1)

参加費 **無料**

定員 **160名**

※申込みはFAXもしくはホームページより行ってください。  
申込み締め切りは11月5日(木)15:00までとなります。  
※定員になり次第申込みを締め切らせていただきます。

## プログラム program

### 第1部

●開会あいさつ【島根大学長 服部 泰直】  
13:00～13:10

●基調講演【高大接続改革で何が変わるのか?】  
13:10～14:10  
リクルート進学総研所長/リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
文部科学省高大接続システム改革会議委員・小林 浩

14:10～14:20【休憩】

### 第2部

●パネル・ディスカッション【高大接続から入試改革を考える】  
14:20～15:50

パネリスト/「取組事例紹介(各20分)」  
1.島根県立松江北高等学校 校長・泉 雄二郎(島根県公立高等学校長協会 会長)  
2.広島県立西条農業高等学校 校長・立上 良典(広島県高等学校長協会 会長)  
3.島根大学地域課題学習支援センター長・松崎 貴(島根大学生物資源科学部 教授)

助言者/  
リクルート進学総研所長/リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
文部科学省高大接続システム改革会議委員・小林 浩

コーディネーター/  
島根大学教育・学生支援担当副学長・荒瀬 榮

15:50～16:10【休憩】

●総合討論 16:10～16:40

## お申込み・お問い合わせ先

主催:島根大学 ■共催:一般社団法人国立大学協会

島根大学 教育・学生支援部 教育・入試企画課

TEL0852-32-6073 FAX0852-32-9726

[E-mail] epd-nnyushi@office.shimane-u.ac.jp [HP] http://www.shimane-u.ac.jp/

【お申込み専用HP】  
http://www.leaf.shimane-u.ac.jp/enquete/no/sympo



国立大学法人 島根大学 教育・学生支援機構 入学センター 編

---



人とともに 地域とともに  
国立大学法人

島根大学

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060

TEL:0852-32-6625 FAX:0852-32-9726

URL: [admissioncenter@office.shima-u.ac.jp](mailto:admissioncenter@office.shima-u.ac.jp)